自由時間

VOL. 8

「私はベロを出します」
国立の地域民主主義をになった早坂禮吾の活動　田島　すみ子

◆詩◆　多摩川　やなぎまちてるこ

描くということ　生きるということ
明治のイコン画家　山下りんを追う旅より　吉澤　エミ

◆講演会報告◆
遠い記憶の旅
ふるさと青森の〈ボド〉抄　草場　弘子

◆詩◆　森のキコおばさん　やなぎまちてるこ

「ハムケ　共に」
三人の在日朝鮮人女性へのインタビュー　原　和美

◆農園だより◆　町田　輝子

「自由時間」……

なんだかウキウキ、ワクワクしてきます。学生時代、何ら制約のない「自由時間」は最もうれしかった時のひとつ。

二〇年ほど前から立川の女性たちの聞き書きをしながら、「つむぐ」という冊子を編んできました。養蚕や織りで毎日を紡いでいた祖母たちの暮らし、砂川闘争の中で人間として急成長していった女たちの姿、占領下の女性たちの光と影など、私たちが「縁」を持った立川で女性がどんなふうに歩み、何を感じてきたか、「聞き書き」を通して見つめなおしてきました。二〇〇二年三月に発刊した「つむぐ一〇号―立川の女性たちの近・現代の歩み―」をこれまでの私たちの活動のまとめとし、これからはそれぞれがそれぞれの「自由時間」を楽しく書いていきたいとこの小冊子「自由時間」を創刊いたしました。

日々の暮らしの中で疑問に思っている事、各自の生活の中での思いや紀行文など、皆さまへの「お便り」のように綴っていきたいと思っています。

人生の自由時間、ひと仕事終えた後の自由なひととき――　私たちの「自由時間」にいくばくかの風を感じていただけたらと念じています。

二〇〇三年九月

「つむぐ」の会

自由時間

NO. 8

「私はベロを出します」

国立の地域民主主義をになった早坂禮吾の活動

田島　すみ子

▼△・▼△・▼△・▼△・▼△・▼△・▼△・▼△・▼△・▼△・▼△

ことばを武器として

金のある者は金を、ひまのある者はひまを、力のある者は力を、知恵ある者は知恵を出し合おう！をスローガンにやってきました。

早坂禮吾さんから三十年も前に聞いたことばが、この数年意味深いことばとしてよみがえってくる。

早坂さんは国立町(現東京都国立市)が文教地区に指定された「浄化運動」のやり方を、こ

のように表現した。それは、活動や考え方に共鳴するのならいろいろなかかわり方があるのだよ、参加するか参加しないかの二つの道だけではなく、共鳴・共感を示す方法は柔軟に考えて選べばいいのだよ、と言っているように感じられる。

＊

私は一九七〇年に国立市公民館の職員となり、何度か早坂さんの講演を聴く機会を得た。その当時早坂さんは、浄化運動と教育委員会活動の偉大な功労者であり、島崎藤村研究を世に問う日本文学専攻の大学の先生であった。同時に公民館で市民の読書会を指導し、「くにたち公民館だより」や「図書室月報」（国立市公民館発行）に原稿をお願いするとこころよく書いてくださり、住民運動の聞き取りにも応じてくださった。私は実際にそうしてお話を交わしたのに、当時は経歴と業績の大きさに委縮していた感がある。熱く激しく語るというタイプではなく、淡々と静かに話された。その話し方は、理詰めに詰めていく理論家という趣きで、日々暴力や脅しにさらされた浄化運動の副委員長の姿は想像できないものだった。私は早坂先生とおよびしていたが、町の人は親しみと尊敬をこめて、早坂さん

早坂禮吾さん

とよんでいた。ここでは私も、早坂さんとよばせていただく。さまざまな節目に早坂さんのことばを読み返し、そのたびに、町を、公民館をつくってきた思想とエネルギーが、やさしくリアルに表現されていると感じてきた。

その中でも冒頭のことばはとくに印象深いことばだった。できないことを憂うより、できることは何かと考える。かつての文教地区指定運動でもそうやってきた。いま、自分には出しあうことのできる何があるのか、自分にきいて、自分で答えを出す。ひじょうにすっきりとしたやり方ではないか。

早坂さんのこのことばは、いつどこで語られたのだろう、原文をはっきりさせておきたいと思いたった。調べていく中で、日本文学の研究者でことばの専門家だった早坂さんはかずかずの印象深いことばを残しており、ことばの力を駆使した、あるいは行使した人であったことが浮かび上がってきた。同時に、戦後の素朴な住民民主主義運動が時間を追って複雑化する中で、早坂さんのことばにとまどいや苦悩のあとも残されていた。現代は世界をとらえる大きな発想をもちにくく、人間関係の疎外が進む時代といわれる。だからこそ、早坂さんのことばを再発見、再認識したいと思う。

*

早坂禮吾さんは、一九五二年国立が文教地区に指定された住民運動の中心的な人物のひとりであった。一九一三年、仙台市生まれ。日本文学が専門の教職にあり、『源氏物語』（弘

文堂　一九五〇）の著書もあった。運動がはじまった時は、東京女子大学から専修大学へうつったばかりだった。

文教地区指定運動については後述するが、一九五一年町の浄化運動に端を発したもので、女性や青年、大学・学校などがホテル業者などを相手にし烈なたたかいを繰り広げ、翌年東京都条例による「文教地区」をかちとり、自分たちの町を自分たちの手で守り作っていった運動である。この運動を機に住民はよくまとまり次々に要求を実現させていった。現在の国立市民にとっても先輩たちのかけがえのない運動と理解されている。文教地区をかちとった勢いは教育委員の選挙にも生かされ、早坂さんは一九五二年に公選制教育委員になり、委員長に選ばれた。任命制になった後も一九六七年まで国立町の教育委員長をつとめた。一九五五年には公民館を発足させ、二年間は公民館長も兼務した。

世の中を楽しくしようじゃないか

冒頭のことばはまず、一九七六年の市民文化祭の講演録に残されている。

それによると、一九五〇年、国立へ引っ越した翌年に早坂さんは呼ばれて国立会の事務所へ行った。国立会は、戦争中の隣組だった組織を改変してつくられた新しい文化的な住民の自治会である。そこでは人が集まって「何かもう少し世の中を楽しくしようじゃないか」ということを話し合っていた。意見を求められて早坂さんは、

「住みいい町をつくるんだったら、みんなで自分のものを少しずつ出さなきゃだめだと思うと、金のあるやつが金を出したらいいんだよと、暇のあるやつは暇を出すべきだと、それから知恵のあるやつは知恵を出せと、・・・みんなに何かいい案はないかといわれたときに思わずそう言ってしまいました。

そのときにそれじゃ、君は何を出すんだといわれて、そういえば金はないし、あまり暇もないし、それからあまり知恵もないし、べろでも出そうかといったのが災いのもとになって、ちょうどその頃何もなくて、せめて古典でも読もうじゃないかというような人がいたらしくて、それじゃあんたはべろだけ出せばいいからというので、源氏物語の講義をすることになりました。」（『くにたち郷土文化館研究紀要』ＮＯ４　早坂禮吾「文教地区の意味するもの」一九七六年の講演記録　二〇〇二年発行）

これにより、このことばは文教地区指定運動の中で生まれたスローガンではなく、その前から早坂さんの中にあったことばだということがわかった。戦後五年、人家もまばらな国立で、世の中を楽しくするにはどうしたらいいだろうという話し合いがなされた。そこで早坂さんはこのことばを使って考えを提案した。講演で早坂さんは言っているが、時代は下山、松川、三鷹事件の翌年。どこを向いてもぎらぎら、いがいがしたことばかりで、

命がけの危ないことばかりだった。そこで発せられたこのことばは、肩に力を入れて社会不安を嘆く人々の心をほっとさせたかもしれない。みんなで、持っているものを少しずつ出す。ひとりひとりが持てるものを出しあって町をつくっていく。それならできそうだ、むずかしいことではなさそうだ、と人々は思ったのではないだろうか。

このときのことは「図書室月報」三〇〇号（国立市公民館　一九八八年四月）「わたしの読書会」に早坂さん自身が書いてもいる。

「戦争遂行のためにつくられた町内会—国立会もすっかり色あせてしまったが、その中の文化部に集った三十代の人たちが、希望だけを失ってしまわなかったことは、今考えると不思議である。

何か楽しいことをしよう。お金のある人は金を、力のある人は力を、知恵ある人は知恵を出しあって—がモットーとなった。私は金も力もないし、知恵もなかったので出すものがない。それでは『ベロ』でも出そうかと、始めたのが『源氏物語』の読書会であった。・・・・国立の読書会の原点である。」

一九五五年に公民館ができてからは早坂さんを指導者にたくさんの読書会が生まれたが、すでにその前の時点・一九五〇年から早坂さんは住民の読書会活動を行っていたのだ。「世

の中を楽しくする」方法として、地域自治会で読書会を始めたということはたいへん興味深いことだ。

浄化運動の“参謀長”として

国立の浄化運動・文教地区指定運動は、一九五一年春から始まった。この運動で大学生の中心人物の一人だった赤松宏一さんによって月刊誌『都政』に連載された「町の政治」という小説が早坂さんの活躍を伝えている。この連載は昭和三三（一九五八）年三月号から六回にわたっている。小説ではあるが、できごとや事柄は事実に基づいており、早坂さん自身も運動を知る資料としてすすめているものだ。この運動は、住宅街の中にホテルが次々とでき生活をおびやかされた住民が、建設に反対してたちあがった。まず国立町浄化運動期成同志会が結成され早坂さんは副委員長になった。早坂さんは仲間の人たちから「参謀長」と言われた。この運動を「浄化運動」と名づけたのも早坂さんだった。運動がすすんでいくと東京都条例の文教地区に指定することによってホテルを締め出そうということになった。小説「町の政治」の中で早坂さんにあたる「早川さん」は言う。

「青年は青年層を、婦人は婦人層を組織していくと同時に、この同志会として大きな組織活動を展開する時期になったと思うんです。敵の足もとをくずすにはそれしかあ

りませんね。このためには全部の人が全力をあげなきゃだめですよ。中岡さんのように金のある人は金をだす。青年や婦人方は行動力をだす。私のように何もないものはベロをだして、せいぜいしゃべりまくる」（『都政』一九五八年五月号　赤松宏一「町の政治」第三回　）

「金のある者は金を、・・・」という早坂さんのことばは、赤松さんによってここに記録されている。つづけて早坂さんは新しい組織の名前を提案して、「私たちの住んでいるところを文教地区にしてもらうための会」という名前の会が生まれた、と書かれている。

ことばの人、早坂さんがやったことはもっとある。一九七六年の講演で、自らこう語っている。

「宣伝ビラを書くのが専門で、一生懸命毎日毎日、赤松君という人と二人で、宣伝ビラを書いて・・・文教地区問題というのは本質は何かということをお説教ではだめだというんで、太郎さん、花子さんがああでもない、こうでもないと話し合う形を私が創作いたしまして、そういう小説まがいのビラを毎日毎日ガリ版で一枚ずつ出していきました。そんなことをしていました。」（前掲紀要　早坂禮吾）

こうして、

「お金のある人は金を、暇のある人は暇を、智慧のある人は智慧を―をスローガンとして団結し、遂に文教地区指定をかちとった。」（「図書室月報」一九八九年八月　早坂禮吾「エピキュール賛歌」）

早坂さんは「ベロを出した」。「しゃべりまくる」だけではなく、ことばを駆使する人として運動を的確に名付け、毎日新しいビラを工夫した。運動において、「金」、「暇」、「知恵」が必要で大切だとはだれもが思うが、「ベロ」（ことば）がそれと同じくらい重要だとはあまり意識しない。早坂さんは、それを自分が出すものとして、若干卑下した言い方で「ベロ」と言ったのだ。

浄化運動・文教地区指定運動ではどうして住民がしっかりまとまることができたのかについて、早坂さんは「文教地区の意味するもの」（前掲講演）のなかで興味深いことを述べている。国立は一九二三（大正一二）年の関東大震災を機に山林を切り開いてできた新開地である。敗戦までは人家もまばらだった。戦後の住宅難で家を探していた人たちが、その頃安かった国立にやっとの思いで家を建てた。早坂さんも一九四九年に国立に家を建てるまでの六年間に、十回引っ越しをした。国立に来たのは国立がいいからではなく、そこ

しか行くところがなかったからだ。いやになったといってどこかへ行くこともできなかった。住民の多くは似たような人たちで、町に愛着をもっていた。「土地というもの、住んでいる場所というものと自分というものが非常に密着している」、「よそからひょろりと入ってきた移住者であったにもかかわらず、あたかも土地付きの人のような感情というものを、ぼくは持っていたように思うんです。」ホテル業者などの進出に対して住民が固く結束し阻止したのはそのような町への思いが大きかったのだ。

播いた種は生えるはず

早坂さんは文教地区に指定された一九五二年に行われた教育委員の選挙に立候補した。赤松宏一さんは「町の政治」で書いている。

「皆の目が、教育委員候補として自分に白羽の矢をたてているらしいことに気づくと、早川先生はむっつりと考えこんでしまった。学者としての生活に、ある決断を迫られたのである。インテリをもって任ずるものは、どんなことがあっても政治の泥沼に足を入れてはならないというのが日本の社会常識であり良識である。」（『都政』一九五八年一一月号　赤松宏一「町の政治」第五回　＊早川先生は早坂さんがモデル）

しかし、早坂さんは立候補し、当選し、委員長に選ばれた。

教育委員会は発足にあたって「声明」を出した。

「発足にあたり本委員会は日本国憲法を守り、教育基本法を尊重し、教育・学術及び文化の発展向上を図り、町民の福祉を増進するために、何ものにも捉われず、何ものにも屈せず、厳粛・公正に職務を遂行して、町民各位の信託にこたえることを誓約する。

右、声明する。昭和二十七年十一月一日　国立町教育委員会」

（「国立町報」昭和二七年一二月）

また、早坂さんは委員長として次のように述べた。

「教育委員会は『教育委員会法』第一条にもうたっているように、教育をあらゆる権力から解きはなち、自由にかつ良心的にあらしめることを第一の任務として居ります。教育は理想であります。理想は必ずしも常に現実と一致するとは限りませんが現実を忘れた理想が単に空想にすぎないように、理想をもたぬ現実は凡そ無意味であります。私達は常に理想を高くかかげ、その実現の為に、去る十一月一日『声明』を以て誓約

したようにあらゆる努力を捧げんとするものであります。」（前掲町報　早坂禮吾「御挨拶」）

公選教育委員がどれほど強い使命感をもっていたか、その背景には人びとの大きな期待があったのだということがうかがわれる。

教育委員会は人口の急増にともなう学校の整備など課題は山積していた。そんな中で一九五五年には、旧自治体警察署の建物を転用して、住民の長年の悲願だった公民館を誕生させた。早坂さんは公民館長も兼務することになった。

公民館活動の中でも、早坂さんはことばを生かして呼びかけた。いま、えらい人のあいさつといえば形式的なものが多く聞く方もあまり期待しない。しかし早坂さんのことばはその対極にある。印象深いいくつかをあげてみる。

「ここではっきりさせておきたいことは、公民館が発足したとはいえ、ここに完成した公民館が『ある』のではないということです。公民館は、これからわれわれの手で『つくり上げてゆく』ものだということです。公民館は町民一人一人の愛情深い批判と協力とによって成長するものであることを銘記したいものであります。」（「国立町報」一九五五年一一月　早坂禮吾「公民館の発足にあたって」）

「一つの仕事をなしとげるに必要なものが三つある。第一のものは、それが『必要』なのだという要求である。第二はそれを実現しようとする『工夫と熱意』、第三はそれに要する『金』である。しかし、一があれば、二は自ら生まれる。二があれば、三は湧いてくる。それを実証したのがわが公民館の生いたちである。

文教地区をつくりあげ、自分たちの意志を町政に反映させることに成功した町民われわれは、団結の力がどんなに強いものであるかを知った。そしてその団結の基礎になるものが、互いに知り合うという、きわめて日常的な活動の中から生まれるものであることを理解した。公民館がほしい、町民の共通の広場としての公民館がほしい、という声が町民の間に高まっていった。その力に押し出されて公民館が誕生したのはもう十年前になる。そのとき公民館は予算を一銭ももたず、太い格子のはまった留置所付きのガランとした元警察署に、財産といえばただでもらってきた一枚板に、黒々と書かれた『国立町公民館』という看板があるだけだった。

しかし種子は播かれた。『播かぬ種子は生えぬ』ということわざがあるから播いた種子は生える筈だというのが唯一の理論である。それから十年、かくてわが公民館は今や国立町団結の中核となった。もちろん今日でもいろいろの批判はある。妥当な批判は謙虚に受けて修正されねばならぬ。だが、それがズボンのポケットに手をつっこん

だままの批判なら恐れるに足りない。その人達はまず公民館を訪れて、そこに集う町民の生き生きした表情に学ぶ必要があるであろう。」（「公民館だより」一九六四年一月　早坂禮吾「公民館創立のころ」）

「播かぬ種は生えぬ、播いた種は生える筈だ」、
「ポケットに手をつっこんだままの批判なら恐れるに足りない」
ということばも、早坂さんは繰り返し使った。先にあげた講演でも言っている。

早坂さんが教育委員長兼任の公民館長だったのは、公民館発足から二年足らずだったが、その後も「公民館だより」や「図書室月報」に早坂さんの文章やお話の記録がたくさん掲載されている。

「沖縄の今日　何がどのように問題なのか」（「公民館だより」一九六二年七月）は、この年二回アメリカの統治下におかれた沖縄を訪問し、「日本は戦中戦後を通じ、沖縄を防波堤として利用してきたのではなかったか。・・・沖縄事情に関しては知る義務もあるのではなかろうか。」と書いている。この原稿は町内、町外で早坂さんが話したことが大変感動的な話として評判になり依頼したものだと編集後記に書かれている。

「生誕百年の作家たち―もう一度漱石を読もう―」（「図書室月報」一九六六年四月、のちに「公民館だより」に転載）

「わたしの読書会」（「図書室月報」一九八八年四月　前掲出）集『エピキュール』　かつて国立の町にこんな喫茶店がありました」）などがあるが、どれも顔の見える人たちに話をするように諄々と説いている。国立の町を愛し、町民・市民を信頼した早坂さんの思いがこもっているものだ。

読書会の様子（右奥　早坂さん）

白紙に近い勤務評定

一九五七年、教職員の勤務評定をめぐる問題、いわゆる勤評問題が起こった。国立町教育委員会は当時の砂川、清瀬、保谷の町とともに勤評を実施しなかった。一年にわたる東京都教育委員会とのやり取りの末、「ほとんど白紙に近い勤務評定書を提出」（「公民館だより」一九五九年八月）した。四町方式とよばれている。勤評問題について早坂さんのことばが残されているのは、裁判の証言や、ＰＴＡの広報、青年団体のビラなどである。そこからは、勤評問題は東京都や国という権力を相手とするたたかいであったことや、国立町教育委員会はＰＴＡ・町民と一体となって取り組んだことがわかる。

資料のひとつは宗像誠也、国分一太郎編『日本の教育―“教育裁判”をめぐる証言―』（岩

波新書一九六二年）の「教育委員長として勤評を実施しなかった理由につき早坂礼吾の証言　60年7月18日」である。市町村教育委員会の主体性が主張されている。

「教育制度が非常な勢いで中央集権にもどりつつあるということを皮膚から感じておりました。・・・中央集権は、わたしどもは教育委員としては防がなければならない。実施権をもっている市町村教育委員会を完全に無視しているということ、それからそのやり方がきわめて問答無用というような無理おしでやってきたということについて、わたしは非常に強く問題を感じたのであります。」（一六七ページ）

またその内容について、

「人格の評定がたくさん入っています。・・・計ることができないものを物さしで計れ、物さしがないものを物さしで計れ、というような要求が非常に多い。」と批判している。（同ページ）

ＰＴＡ、青年団体の出したものも早坂さんのことばを伝えている。パンフレット『“勤務評定”をめぐって』（ＰＴＡ教養シリーズ第一号　国立町町立小中学校ＰＴＡ連合会　一

九五八年二月）をはじめ、「協議会ニュース」（国立町立学校ＰＴＡ連絡協議会）、「勤評ニュース」（国立第三小学校勤務評定対策委員会）、「正道を歩もう」（くにたち青年懇談会運営委員会）というアピールなど。これらを読むと、早坂さんはＰＴＡや住民団体と何回も何回も話し合いをもち対処を考えていったことがわかる。パンフレットに収録された「“勤務評定”とは」では次のように述べている。これはＰＴＡ連合会主催の講演会で講演に先立って解説したものである。

「皆さんが本当に理解した上で、賛成反対の意思表示をして下さるのならば、我々教育委員会は喜んでその側に立つことをお約束します。」

それからおよそ二十年後に書かれた文に当時の雰囲気が伝わるものがある。『ぽぷら並木』（発行者・宮城学院内早坂禮吾　一九八二年三月）に収録された、遠藤信太郎の追悼文である。遠藤信太郎は長く教職にあり、退いてから公選教育委員となり、早坂さんと一緒に教育委員を二期務めた。ここで早坂さんはこう言っている。

「（教育委員会は）苦しい財政の中で、中学校やいくつかの小学校をつくらねばならなかった。給食設備も公民館もつくらねばならず、また町教育の自主性の確立という大

事業もあった。すべてがこの町の出合う最初の試練であったから、教育委員会は常に独創性を要求された。（遠藤）先生はつっ走りがちな委員長（早坂）を立てながら、いつも静かなブレーキの役を果たして下さった。しかし、何といっても我々教育委員が鉄の団結で戦った勤務評定問題は忘れることが出来ない。毎晩のような集会の連続でくたびれ果てた私に、いつも『委員長ばっかり働かせて済まないねェ』といたわって下さった。それがどんなに我々の疲れをいやしてくれたことか。」（カッコは引用者）

当時の教育委員会の動きがよく伝わってくる。

勤評問題では、国立町教育委員会はがんばった。委員長の早坂さんは精力的に町民に訴え、話を聞いた。ＰＴＡは教育委員会のとる態度を支持した。この動きは浄化運動で盛り上がった住民運動のエネルギーがもっともよく活かされた結果だと評価されている。

持ち寄りの思想をふたたび

早坂さんは一九七九年四月に仙台の宮城学院院長に就任した。宮城学院を発行所とする早坂さんの著作がシリーズ「ポプラ・パンフレット」として「5」まで発行されている。いずれも短い文を集めた五十ページ前後のうすいものだ。

「ポプラ・パンフレット　3」に早坂さんはこう書いている。

「かつて私の住む国立の町に『文教地区運動』というものがおこった。もう四半世紀も前のことで、その頃は未だ『市民運動』などという言葉はなかった。いや、少なくともやっている本人は知らなかった。未だ『形』がなかったから、ある意味ではひどく独創的であった。必死の目標はあったが、各々はそこで何をしてよいのかわからなかった。その時の指導原理になったのは、誰言うとなく口々に伝わった『金のある者は金、ひまのある者はひまを、力のある者は力、知恵ある者は知恵を！』というスローガンであった。そしてそれが忠実に実践され、『不公平だ』などと言う思いが胸に浮かばなかった時、気がついたらそこに勝利があった。

その後市民運動の理論は急激に発達した。理論を持たない我々は太刀打ち出来なくなった。『持ち寄り』の思想は形式的な公平を欠く故に批判され、すべてが公費でまかなわれることが原則であるかに主張された。『形』が出来はじめるとたちまち『形』にとらわれ、『形』が支配し始めた。」（『ぽぷら並木』一九八二年三月）

また「ポプラ・パンフレット　1」には次のような詩がある。

「播かぬ種は生えぬという　／　播いても生えぬ種もある　／　播けば必ず生えると

は限らない　／　だが―絶対に確実なことは　／　播かない種は決して生えることはないということだ　／　だとすれば―　／　やっぱり我々は種を播きつづけなければなるまい。」（『けやき並木』一九八〇年二月）

この二つの文を読んで、早坂さんのとまどいや無念さが伝わってきた。一九六四年に『播かぬ種は生えぬ』ということわざがあるから播いた種は生える筈だというのが唯一の理論である。」と述べた早坂さんが、一九八〇年には「播いても生えぬ種もある／播けば必ず生えるとは限らない」と述べている。「金のある者は金を・・・」についても、「持ち寄り」の思想で公平性を欠くと批判されたという。

これらの文からは批判に納得できない早坂さんの声が、「それでもやっぱり・・・」と聞こえてくる。早坂さんは、問題の解決は「公」の役割だとする主張に住民の主権を投げ出すような危険性を感じたのかもしれない。また、一九七〇年前後からは日本国内でも世界でも市民運動、社会運動が広がり、ベトナム反戦運動や反公害運動などが盛んだった。そこでは「否」、「NO」ということばに象徴されるように、権力対市民という構図がクローズアップされたが、「住民」が前面に出ることは少なかった。その中で早坂さんはかつての国立の浄化運動のやり方を批判されることがあったのかもしれない。

さらに一九七四年に早坂さんは、国立市基本構想作成委員会の委員長になった。四二人

のメンバーの束ね役である。『国立市史』によると、基本構想作成にあたっては意見の食い違いが生じたびたび紛糾したという。当初より大きく遅れて答申が出されたが、早坂さんにとっては不本意だったのかもしれない。

・・・しかしいろいろと詮索するよりも、いま大切なことは、早坂さんの思索の中から「やっぱり我々は種を播きつづけなければなるまい」と私たちに課題が与えられたことだろう。

「金のあるものは金を・・・」という冒頭のことばがどうしてこう印象深いのだろうと考えると、早坂さんの考えの底に「公平」ということがあるからではないかと思われてくる。しかしこれが公平性を欠くという批判を受けたという。それこそ形式的ではないかと思う。たしかに公費でまかなうべきは公費でまかない、制度ができて問題解決が進むことは進歩であり、公平の基本ではある。しかし、現代においてはそこから取り残される問題や制度の形骸化も浮かび上がってきた。制度だけではすくいとれない部分があるということは誰もが知っている。そこにまた「持ち寄り」の思想の出番が回ってきたとはいえないだろうか。

「持ち寄り」の思想ということばは、この『ぽぷら並木』ではじめて出てきた。なかなかいい名付けではないか。誰でも、それぞれが持てるものを持ち寄ってやっていこうという考え方。それを今の時代にどう展開させるかが問われることになる。たとえば次のよう

なことばは、「持ち寄り」の思想にたいへん近く、さらなる可能性を示している感じがする。ホームレスの人が販売する雑誌『ビッグ・イシュー』について脳科学者の茂木健一郎は「多様な価値観を認めることで制度の脆弱性を補う」、「善意を社会化する構造をつくらないと、人間は生きのびられない」（『ビッグ・イシュー』一五〇号　二〇一〇年）と述べた。さまざまな疎外が進む中で、「持ち寄り」の思想は素朴な人間性に満ち、人びとの気持ちを軽くし、前向きにしてくれる。いま人間関係の貧困がいわれて、人のつながりをつくる大切さが見直され考えられるようになった。みんなを輪の中に誘う原初的な方法として、「持ち寄り」の思想はリアリティがある。初心に戻るために、一人一人がかかわるために、みんなでやっていくために、とてもよいやり方ではないだろうか。

誰でも、一人一人が主人公となる「持ち寄り」の思想。「金のある者は金を、暇のある者は暇を、知恵のある者は知恵を・・・」六十年前に発されたこのことばを、いままた使っていきたいと思うのである。

*

ここに上げたかずかずのことばは、早坂さんが必要に促されて素手で考えた、親しみやすい民主主義のことばである。やさしく表現されているが、一九四五年の敗戦によって獲得した主権在民の思想に貫かれている。早坂さんが取り組んだ住民運動や教育委員会活動は独創的でなければならなかった。お手本も「形」もなかったのだから。

早坂さんには日本文学研究者としてのお仕事や宮城学院院長のお仕事などたくさんの業績があるが、ここでは戦後民主主義を地域に築いた先輩市民としての早坂さんにだけふれた。早坂さんは一九九七年二月に八三歳で逝去された。

〈参考文献〉
早坂禮吾「文教地区の意味するもの」(『くにたち郷土文化館研究紀要』NO4　二〇〇二)
早坂禮吾『ぽぷら並木』(ポプラ・パンフレット3　宮城学院内早坂禮吾　一九八二)
早坂禮吾『けやき並木』(ポプラ・パンフレット1　宮城学院内早坂禮吾　一九八〇)
「くにたち公民館だより」(国立市公民館)
「図書室月報」(国立市公民館)
「国立町報」(『市報くにたち縮刷版』1収録　国立市　一九七七)
赤松宏一「町の政治」(『都政』都政調査会　一九五八・三月号〜一九五九・一・二月号)
宗像誠也、国分一太郎編『日本の教育―“教育裁判”をめぐる証言―』(岩波新書一九六二)
『“勤務評定”をめぐって』(国立町町立小中学校PTA連合会　一九五八)
国立市史編さん委員会『国立市史』下巻(国立市　一九九〇)

多摩川　やなぎまちてるこ

川面に
とぎれることなく　光の波
対岸の木々が
若葉の色に彩られ
土手を散歩する　犬も人も
ゆっくりと歩いて
時間が流れる

岸辺のせせらぎでは
メダカの群れが
小さな身体を
ゆらして泳いでいる

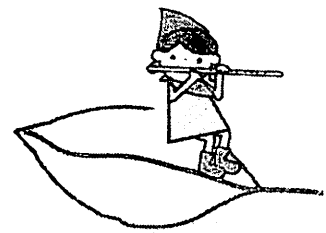
網をそっと流れに入れて
父親と男の子は
メダカを追っている
つかまえて　大きな歓声があがる

頭をよせ合って
バケツをのぞいている。

土手の草むらで
写生をしている　私
友だちもおもいおもいに
描いている

水面を見つめていると
ゆるやかな流れが眠気をさそう
描くのをやめて
青草の上に寝ころんで
目をとじる
草のにおい　日なたのにおい
身体いっぱいあびる
ぬくもりがあふれてくる

たまがわのふところに
遊んだ一日



描くということ
生きるということ

― 明治のイコン画家　山下りんを追う旅より ―

吉澤　エミ

山下りんとの出会い

「ハリストス復活」を目の前にして

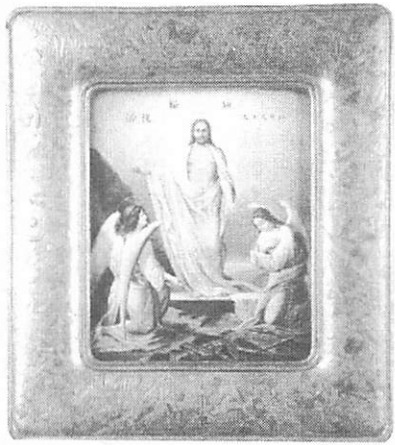
ここはペテルブルグ・エルミタージュ美術館付属施設、イコン画（聖画）の保管修復センターの一室。

「どうぞ近くで手に取って見てください。」とこの施設の責任者であり美術史家でもあるアウグスタ・ギムナジュルナ・ポピンスカヤさんの言葉に促されて、こわごわ覗きこみ目を凝らして見つめるその絵は、山下りん制作のイコン画「ハリストス復活」。

二人の天使にかしずかれ、復活するハリストス（キリスト）、その背後のまばゆい光が画面を明るく照らす。額縁には草花文様の金蒔絵と十字がほどこされ、額縁の裏側には蒔絵師「高井安治」の名前が刻まれている。

ロシアと日本文化の調和と融合を象徴するこのイコンは一八九一年（明治二四年）日本に来日していたロシア皇太子ニコライ（後の皇帝）に献上したものであった。しかし一九一七年（大正六年）のロシアの政変により、ニコライ皇帝一家は殺害され、このイコン画もまた行方しれずになっていた。

「ハリストス復活」が暗殺された皇帝ニコライの遺品の中から発見されたのは一九八七年。ゴルバチョフのペレストロイカ（改革）の時代を迎え、グラスノスチ（情報公開）政策が着々とすすめられていた頃のことである。



はじめて知る女性画家　山下りん

日本で唯ひとりの、明治のイコン画家　山下りん。わたしがその存在を知ったのは今から二十数年前、美術史家でありフェミニズム運動にも積極的に発信、発言していた故若桑みどり著『女性画家列伝』

（岩波新書）を手にしたことがきっかけであった。

一九八〇年代は女性差別撤廃条約、男女雇用機会均等法など国際的にも女性問題への関心がたかまり、フェミニズム運動が大きなうねりとなっていた頃である。

この著書に登場する女性画家十二人のうち、日本人女性は上村松園、ラグーザ玉そして山下りんの三人。上村松園、ラグーザ玉は美術界のみならず小説や伝記になるなど既に知名度は高く、妖艶な美人画や幻想的な作風は多くの人を魅了し続けてきた。

しかし山下りんは私にとって、はじめて知る女性画家。しかもイコン画という一般的には馴染みのないジャンルの画家である。

一九八〇年代はまた、美術史の観点から山下りんについての研究や調査がやっと緒に就いたばかりの頃で一部の美術史家や山下りんの弟、峯次郎の孫である小田秀夫氏らによって少しずつ明らかにされていく途上にあった。

個人の芸術作品である一般絵画と違い、敬虔な祈りと信仰の対象であるイコン画には制作者の名前が刻まれることはない。それが調査、究明がなかなか進まない要因とされてきたのだった。

山下りんの晩年の二十年間を、同じ敷地内で生活を共にし、りんの遺品を受け継いだ小田秀夫氏ですら、りんの画家としての業績を知ったのは、りんの死後三十数年経てのことであったと氏の著書『山下りん』（日動出版社発行）の中で語っている。

この『女性画家列伝』が出版されたのは一九八五年、当時はまだ「ハリストス復活」は発見されておらず、著書の中でもその存在について何ら語られていない。

なぜ私が上村松園でもなく、ラグーザ玉でもなく、山下りんに興味を抱くに至ったのか。もちろん数奇な運命に翻弄され、もがき苦しみながら画家としての才能を開花させていった二人の女性画家も魅力的ではある。しかしこの本で取り上げられている山下りんを除く十一人の女性たちはみな、父あるいは夫、パトロン（愛人）といった身近にいる男性の庇護を受けて才能を磨いてきたという点で、山下りんと一線を画す。

家父長制度が色濃く残る明治の時代、生涯結婚することなく、俗社会との縁を断ち切り、名誉や栄誉とはほど遠いイコン画の世界に突き進み、描くことにすべてを掛けた山下りんはミステリアスな魅力あるひとりの女性として私の前にいた

さらにもう一つの理由、それは山下りんが二十三才にしてイコン画の修業のため海を渡った「ロシア」という国に対する興味である。

私の祖父梅吉は一九〇四～〇五（明治三七～三八）の日露戦争時、衛生兵として中国遼東半島の旅順に配

属されていた。私が幼い頃、祖父の語るバルチック艦隊の話や、片言のロシア語はまだ見ぬ国への興味を誘い、学生の頃、若者の間で読み継がれていたロシア文学やロシア民謡への郷愁は、二十代にしてロシアへ渡った山下りんへの興味をいっそう掻き立ててくれるのだった。

若くして絵の道を志し、紆余曲折を経てイコン画家として歩むまでの道すじ、そこに至るまでに抱いたであろう高揚感や達成感、あるいは挫折する中で味わった悩みや苦しみ、それらと山下りんはどう向き合ってきたのだろうか。

美術史家たちによる研究書、写真あるいは資料などからりんというひとりの女性をイメージすることはできる。しかし実際に足跡が残されている場所を訪ね歩くことによって得られる感触は、山下りんのイメージを更に鮮明にし、より身近な存在にしてくれる筈である。

そんな期待と好奇心に引かれるまま、私はまだ見ぬ土地への旅を思いつく。

二〇〇九年から二〇一〇年にかけて、まわった山下りんを訪ねる旅、そのレポートをまとめる手掛かりに、まずは小田秀夫氏の著書『山下りん』、大下智一著『山下りん』、山下りんが滞露中につけていた日記を参考にその生い立ちを駆け足で追ってみたい。

画家をめざす

一八五七（安政四年）五月二五日、常陸国笠間（現茨城県笠間市）に下級武士の娘として生まれた山下りんは、幼い頃より母や兄の影響で絵に親しみ、その頃より才能を見せていたが、りんが六才の時父が亡くなり、一家は経済的に困窮する。

りんが十五才の時「農家に嫁にやる」という話が持ち上がり、勝気なりんは承知しがたいことと家出を決行。三日三晩かけて江戸の親戚の許に走る。しかしすぐに連れ戻され、翌年、家人を説得し再度上京。浮世絵師、丸山派の有名な日本画家に学ぶも、その日暮らしの困窮した悲惨な生活を見、日本画に見切りをつけ当時新しい絵であった西洋画に活路を求める。

山下りんが新たに選んだ師は西洋画師、中丸精十郎。この選択はその後のりんの進む方向に一つの道すじをつけることになった。

工部美術学校へ—日本最初の女子画学生として

一八七六年（明治一〇年）明治政府の殖産興業政策を担う工部省は、外国人教師を雇い工部美術学校を開校する。翌年には女子学生の募集もあり、りんは警察官になっていた兄、重房や笠間藩主であった牧野氏の援助により受験、合格し無事入学を果たす。

女子工部美術学校にはりんが正教会の洗礼を受け、ロシアに留学するきっかけともなっ

た山室政子をはじめ六名の女子がいた。その中でも山下りんは常にトップの成績、教師からも一目置かれる存在であった。

山下りんは山室政子と親交を深めていくうち、ハリストス正教会入信を勧められ、ニコライにより洗礼を受ける。聖名はイリナ。一八七八年（明治一一年）二十一才の時である。ここがイコン画家、山下りんのスタート地点となる。

工部美術学校ではイタリア人教師フォンダネージの指導のもと、ルネサンスの人間味あふれる遠近法を取り入れた近代絵画の技法を学んでいく。

しかし師のフォンタネージは既に五十八才、持病の悪化を理由にイタリアに帰国。フォンタネージによって目覚めた西洋絵画への探求心は後任の教師では満たされず、不満を抱えて次々と退学していく同輩とともに、工部美術学校を退学する。一八八〇年（明治一三年）一〇月のことであった。

経済的に恵まれない山下りんが将来に不安を抱いていた時、持ち上がったのがロシアへのイコン画修業のための留学の話であった。

日本での大聖堂建設の援助を求めてロシアに帰国し、日本に戻ってきたニコライからの要請によるものであった。はじめ予定した山室政子が結婚することになり、急きょりんに白羽の矢が立ったのである。

「あこがれの留学」、学校を中退し、将来に不安を抱いていたりんにとっては願ってもな

い機会と思えた。しかしこれが後に大きな禍根を残すことになるのである。

ハリストス正教会とは

ここでイコン画家として、りんの生涯に大きな影響を与えたハリストス正教会と主教ニコライについて述べてみたい。

ハリスト正教会は、カトリック、プロテスタントと並んでキリスト教三大教派の一つ。ローマを中心とする西方教会に対し、東方教会とも呼ばれる。正教会の名の通り使徒の時代からの伝統を受け継ぎ、中近東、ギリシャ、東欧、ロシアなどを中心に広がり、特にロシアにおいては国教として根付き、その生活に深い影響を与えてきた宗教である。

イエス、聖母マリアなどイコン画（聖画）は神との対話において絶対的な位置を占めるものであり、敬虔な祈りには欠かせないものとされる。

大主教ニコライ

一八五八年（安政五年）八月、開港間もない函館の地にロシア領事館が開設され、その付属施設として函館復活聖堂が建てられる。

一八六一年、この聖堂の司祭として着任したのが、イオアン・デミトリヴィチ・カサートキン。後の大主教ニコライである。海軍少佐・ディアナ号艦長ゴロヴニンの『日本幽囚

記』を読んで日本に興味を持ち、まだキリシタン禁令下にあった日本に宣教の夢を抱いて訪れたのは、ニコライ二十五才の時。約一年の歳月をかけ、シベリアを横断し函館の地を踏む。

ニコライは日本語の勉強をはじめ、日本の史書や仏教に関する文献を読み、日本の伝統文化を学んでいく。その土地に一つの宗教が根付くためには、まずその土地のしきたりや文化を大切にしなければならないとしたニコライの宣教姿勢は、函館戦争時の敗兵たちにも深い感銘を与え、次々と洗礼を受け信徒となって行く。

ニコライは函館着任から十一年目の一八七二年（明治五年）、東京に移り神田駿河台を本拠地に布教活動を続ける。東京に移って二年後、寄宿制の神学校を設立、続けて女子神学校を併設する。

日本全国を回って行う宣教活動は多くの人の共感を呼び、ニコライを慕う信徒の数は三万人を超えるものとなる。

一九〇五年の日露戦争など日露間の政変により、つらい立場に立たされた時も日本人はニコライを変わらず支持し続けた。

一九一二年（明治四五年）心臓疾患を患い、多くの信徒に悲しまれ、惜しまれつつ永眠する。享年七十五才であった。この年は奇しくも明治天皇が崩御し、明治という西洋と日本文化のはざまで揺れた一つの時代が終わりを告げる。

ロシア留学

【船の旅】

留学先のロシアに向かって横浜港を出発したのは一八八〇年（明治一三年）一二月一三日。同行したのはニコライ主教の片腕と言われたアナトリ神父と聖歌の教師ヤコブとその日本人妻りょう、二人の間の知恵遅れの息子の五人であった。この頃より書かれ始めた滞露日記によると、この知恵遅れの息子の世話、与えられた部屋は雑居部屋、余り物の食事と船上での生活は惨めなものであったらしい。

横浜を出港した後、香港、サイゴン、アラビア半島の港町やなどを経て目的地サンクトペテルブルグに到着したのは一八八一年三月一〇日。三カ月後のことであった。

船上での長くつらい旅は、その後のペテルブルグでの苦悩する日々の前章でもあった。

【ノヴォジェーヴィチ復活女子修道院】

ペテルブルグに到着して五日後、山下りんは受け入れ先のノヴォジェーヴィチ復活女子修道院を訪れ、りんの修道院生活がスタートする。

当初は美術アカデミーに付属する美術館を見学し、西洋絵画や彫刻を見て回り、美術アカデミーの学長を務めていたヨルダンという良き師にも恵まれ、希望あふれる順調なスタ

ートを切ったかにみえた。

しかし近代的な西洋絵画に触れれば触れるほど、イコン画や修道女たちの力量不足や指導不足が不満となり公然と異議を唱えるようになる。

イコン画はあくまでも信仰の対象であり、私意を入れず淡々と原理に基づいて描くものと信じる修道女たちを「オバケ絵」とののしるようになり、修道女たちとの間に亀裂が広がり、埋めがたい溝ができていく。

唯一心の安定と充足感が得られたのはヨルダンの計らいで通ったエルミタージュ美術館での模写の時間であった。しかしその後エルミタージュ美術館への通学も禁止されるようになり、精神のよりどころを断たれたりんは次第に精神的にも、肉体的にも追いつめられていく。

とうとう、日本を発って以来書き続けた日記も付けられないほど体調を崩し、一八八三年（明治一六年）、五年の留学予定を二年で切り上げ日本への帰途に就く。

【帰国】

一八八三年三月、任期満了で帰国の途に就く公使一行とともにペテルブルグを後に、日本に戻ったのは一カ月後の四月。

こうして帰国したりんは神田駿河台のニコライ女子神学校敷地内の宿舎に住み、制作の

合間にはロシア語を教えていたようである。

しかし帰国後の七年間、りんにイコン画を描いた形跡はない。ペテルブルグ時代に押さえられていたものへの反動だったのだろうか。教会を離れたあと、銅版画や石版画、などに新しい道を探る。

【イコン画家としての出発】

山下りんが初めてイコン画を制作したのは、現存するものの中では、一九〇一年（明治二四年）ロシア皇太子（後の皇帝）と同行のギリシャ親王ゲオルギオスに献上した二枚のイコンとされる。しかし皇太子ニコライは琵琶湖周遊中、警護の警察官に斬りつけられ、頭部を負傷。建設されたばかりの駿河台のニコライ大聖堂を訪れる予定を変更、帰国の途へ就く。ウラジオストックに向かうための神戸港で、急きょ献上の儀式が行われたのだった。

りんはその後、駿河台のアトリエにこもり、日本各地に新しく建てられる正教会のために三百六十点にも上る多くのイコン画を制作する。

【故郷・笠間へ】

一九一二年（明治四五年）二月一六日、山下りんの信仰の師であり、イコン画家の道に

導いてくれたニコライ大主教が世を去る。この頃白内障を患い、絵を描くことも難しい状態になっていたりんにとって追い打ちをかけるような大主教ニコライの死。それは大きな衝撃であった。

一九一七年（大正六年）ロシアに起こった社会主義革命により、日本正教会への資金援助が途絶える。財政的に窮乏した教会はりんにアトリエの半分を明け渡すよう伝える。既に白内障が進み、絵を描くことも困難になっていたりんはアトリエを引き払い、弟峯次郎を頼って故郷笠間へ帰郷する。りん六十一才の時である。

故郷に戻ったりんは、訪ねてくれる人もまれで、自然相手の生活を楽しみ、毎日二合の酒を友としていたという。絵筆は一切取ることはなかった。

一九三九年（昭和一四年）一月二六日、弟の家族に見守られ八十一才の生涯を閉じる。笠間に戻り二十年が過ぎていた。今も山下家の菩提寺、浄土真宗光照寺、町の喧騒を離れた静かなたたずまいの墓地に眠る。

山下りんを訪ねる旅

サンクト・ペテルブルグ

二〇〇九年九月二四日午後一〇時、ペテルブルグのプールコヴォ第一空港に降り立つ。日はとっぷりと沈み、明かりがともり始めたペテルブルグの街。気温は十五度。三十度を超す暑熱の東京からついたばかりの身体をここちよい秋風が吹き抜けていく。

山下りんが絵の修業のため夢を抱き、三カ月にわたる船旅を経てたどり着いたのは、今から百三十年前の三月。二十三才の時であった。わたしが故若桑みどり著の『女性画家列伝』と出会って既に二十数年、今やっと山下りんゆかりのペテルブルグの地を踏みしめている。いよいよ七泊八日の山下りんを訪ねる旅の始まりである。

ペテルブルグは十八世紀の初め、ピョートル大帝がフィンランド湾の沼沢地に建設した　人工都市である。「ロシアのもつ豊かな大地＝魂をはぐくむ場」にあえて背を向けた異端の都市であり、「ヨーロッパを望む窓」「ヨーロッパよりもヨーロッパ的」であることをめざし、西欧文化の粋を集めて建設された。（中略）ドストエフスキーはこのペテルブルグを地球上で「もっとも現実離れした都市」「もっとも抽象的で架空の

町」と呼んだ。（平凡社新書『罪と罰ノート』亀山郁夫著より抜粋）

運河を掘り、杭を打ち建材を運び、雪崩と戦う過酷な労働に駆り出されたのは捕虜のスエーデン兵や農奴ら約四万人。飢えや疫病のために次々と命を落とす。そうした多くの犠牲の上に成り立っている街、ペテルブルグ。

一七一二年、首都をモスクワから移した後、ドイツ風のペテルブルグからペトログラード、レニングラード、一九九一年以降はまたペテルブルグと都市名の度重なる変遷はこの都市の悲劇性を物語っている。

山下りんが留学していた一九世紀後半、この時期はクリミア戦争の敗北、農奴解放、社会主義の盛り上がりと帝政ロシアに暗雲が立ち込め、街中に不穏な空気がうごめいていた。

りんが到着して三日後に遭遇したロシア皇帝アレクサンドル二世の暗殺事件は、まさにそうした不安定な政情下で起きた事件であった。

イコン画保管修復センター

九月二五日、この日向かう先は宿泊先のホテルから車で二十分程の場所にあるエルミタージュ美術館・保管修理センター。山下りんの「ハリストス復活」が保管されているこの施設を知ったのは旅に出発するわずか二週間前。山下りんを取り上げたあるテレビ番組か

らの情報であった。

さっそく旅行会社を通じ、その施設を訪れたい理由、ロシア正教、山下りんに関する知る限りの知識を動員、披露し、見学許可を懇願する。「許可が下りた」と旅行会社から連絡が入ったのは出発する二日前のことであった。

修復センターで夫と私とガイドのタチアナさんを迎えてくださったのは、この施設の責任者アウグスタさんと秘書の方の二人。各部屋には鍵がかかり、セキュリティがしっかりと行き届いている。その中の一室に案内された私たちの前に「ハリストス復活」が運ばれてくる。思わず緊張が走る。日本語のガイドをして十年歴のタチアナさんにとっても初めての経験。アウグスタさんはそうした張りつめた空気を和ませ、きめ細かい対応をしてくださるのだった。アウグスタさんは大の日本贔屓。これまで数回来日し、一九九八年～九九年にかけて企画された「山下りんとその時代展」などにも出席され、今なお多くの日本人美術関係者と親交を結んでいる。

美術関係者でも研究者でもなく、ただの一介の観光客にすぎない私たちに示してくださる親切に感謝の気持ちを伝えると、さらに有名なロシア人画家のイコン画の展示室へと案内、イコン画についてレクチャーしてくださるのだった。そこには山下りんが「ギリシャ画」「オバケ絵」として嫌ったイコン画ばかりでなく、西洋絵画の影響を受けたと思われる遠近法構図のイコン画もあり、初めてロシアイコンの奥の深さに触れた思いであった。

エルミタージュ美術館

山下りんが模写に通い、ロシア滞在中で最も充実した時間を過ごしたとされるエルミタージュ美術館。ここは当時のヨーロッパ最高の技術者たちによって造られたきらびやかな冬の宮殿だったところ。ロマノフ王朝の秘宝と帝政崩壊後に国有化されたコレクション、古代エジプトからヨーロッパ二十世紀の巨匠マチスやピカソまで三百万点を所蔵する世界屈指の美術館である。

ここを訪れたのは二七日の午前九時三十分。開館一時間前には既に、前夜の雨が持ち込んだ冷たい空気に震える人々の長い列ができていた。

山下りんは当時ロシアを代表する美術教育機関、美術アカデミーの学長を務めるヨルダンの計らいで西洋絵画や彫刻作品に触れ、イコンと違う遠近法のある表情豊かな魅力的なイタリア絵画に出会う。ヨルダンの紹介でエルミタージュ美術館に通い、模写に熱中する日々。滞露中もっとも充実した時間であった。ここで模写した作品は「宗徒の画」「主十字架ヲヲーノ画」「聖母の画」の三点とされる。

エルミタージュ美術館の前に広がる宮殿広場、中央にそびえる大理石でできたアレクサンドルの円柱、冬宮と向かい合って建つ旧参謀本部の建物、戦勝記念の凱旋門と帝政ロシアの「光と闇」の歴史を刻むこの建物はりんにいっときの至福の時を与えてくれていたの

である。

ノヴォジェーヴィチ復活女子修道院

ペテルブルグの中心部であるネフィスキー通りから五十キロ。宿泊先のホテルからノヴォジェーヴィチ復活女子修道院までは車で三十分。ここは山下りんが一八八一年～八三年までの二年余り住みこみ、祈りのかたわら修道女たちからイコン画の指導を受けた場所である。

当時ここは大小十三の教会と金糸刺繍工房、イコン工房を備えたかなり大規模な修道院であった。尼僧は三百人、ほかに貧民の子弟、女工などあわせて五百人程の女子が生活していたという。

この修道院でりんにイコンの指導をしていたのはニコライ主教の信任あついフェオファニャとアポロニャの姉妹修道女。彼女たちはりんにイコン画の他にもロシア語を教えるなど、最も頼りになる教師のはずであった。しかしエルミタージュ美術館に通い、豊かな西洋絵画に目覚めていたりんと、祈りの大切さを基本とする両者の間に、りん

が滞露日記に「ののしり合う」と記す程、埋めがたい亀裂が生まれていく。

正教会の原理やイコン画について深い知識も勉強する時間もなく、ただひたすら絵の修業のための留学と思いこんでいた山下りんと、まずは正教会の原理と祈りの意味を理解させようとする両者の間に誤解や亀裂が生まれるのは当然のことだったのかもしれない。二人の修道女のりんに対する真意を理解し感謝の気持ちを抱くようになるのは帰国後のことであった。

りんの勝気で一途な思い込みは修道女たちの反感を買い、りんは次第に精神的にも追いつめられていく。こうしたりんの「迷い」「軋轢」「いらだち」は西洋に向かって開き、近代化を進めるロシアが封建的な体制とのはざまでもがき、苦しむ姿と共通する。りんもまた西洋絵画と原理主義的なイコン画とのはざまで苦しみ、五年の留学の予定を二年で切り上げ、帰国の途に就く。異郷の修道院という閉ざされた世界で味わった挫折と孤独の思いを抱いて。

このノヴォジェーヴィチ復活女子修道院は一九一七年のロシア革命時、吹き荒れた教会破壊運動の犠牲となり、わずかに残った廃屋跡は武器弾薬の倉庫となった。ここが山下りんの滞露時代の拠点であったことが明らかになったのは、やはりペレストロイカ以降のことである。

現在、聖堂は復興し、敷地内にはパン工房もある。この日、聖堂を訪れていた女性たちはスカーフで頭を被い、イコンに接吻をし、胸で十字を切り神に静かに祈りをささげていた。この聖堂は受難の時を経て、今人々の敬虔な祈りの場となり、その精神は脈々と受け継がれているのを感じる。

『罪と罰』の舞台を歩く

イサーク聖堂

九月二八日、ペテルブルグの旅のもう一つの目的であり、若き日の追憶のルートでもあるドストエフスキーの『罪と罰』の場所、まずはイサーク聖堂へと向かう。主人公のラスコーリニコフがアパートの小さな窓から毎日のぞいていた所だ。高さ百メートル、収容人数一万四千人といわれる、その壮大で威圧的な外観は、歴史的な建造物が立ち並ぶペテルブルグにあってもひときわ目をひく建物だ。

中は孔雀石の柱、天井画、聖人のモザイク画と目を奪われる程の贅を尽くしたもので埋まっている。ドームには展望台があり、展望台までは通路の途中からは外階段（はしご階段）を登らなければならない。この日はあいにくの大粒の雨が降りしきり、水しぶきが足元を濡らす。足元の六十メートル程下に、イサーク聖堂の広場が小さく見える。高所恐怖症の私には絶対絶命のピンチ。やっと辿りついた展望台から眺めた運河の上の人工の都市、

ペテルブルグの町は威容さが際立ち、壮観である。

センナヤ広場周辺

宿泊先のホテルから歩いて十分。小説にも登場するウラジーミル教会を過ぎると、地下鉄ドストエフスキー駅だ。駅の近くの通りに文豪ドストエフスキーの像が立つ。路地を入るとやがてラスコーリニコフのアパートがあり、そこにはドストエフスキーのプレートが刻まれている。

センナヤ広場に向かう途中、ドストエフスキーがお気に入りだったという、『罪と罰』を執筆したアパートがある。今は工事現場となり、立ち入り禁止の札が立てられてあった。

金貸し老女の家のある運河沿いの道を歩き、ラスコーリニコフが罪を認め自首するために出向いた警察署を運河にかかる橋の上から眺め、センナヤ広場へと向かう。そこは恋人ソーニャの「十字路に行き、大地に接吻しなさい」の言葉に従い、自らの罪を告白しようとしたところ。ここは十字架の象徴として重要な意味を持つ場所だ。

この日のコースの最後の場所はドストエフスキー記念館。一八七九年から五十九才で亡くなる八一年一月まで人生の最後の二年間を過ごしたアパートである。展示されている直筆の原稿やゆかりの品は、今も多くのファンを引きつける。

アレキサンドルネフスキー大修道院

九月三十日、ドストエフスキーの眠るアレキサンドルネフスキー修学院に向かう。ここはピョートル一世の命令によってエカテリーナ二世が完成させたネヴァ川のほとりに建つロシア四大修道院の一つ。敷地内には二つの墓地があり、その一つチフヴィン墓地にドストエフスキーが埋葬されている。他にチャイコフスキー、リムスキー＝コルサコフなどロシアの有名な音楽家たちが眠っている。緑の木々に覆われた静謐な墓地。一九世紀の著名な人々の墓前には市民やファンの捧げる花束が絶えることがないという。

ドストエフスキーと山下りんが多少の縁があったことを知ったのは旅から帰ってから間もなくのこと。『日本正教会の歴史　亜使徒聖ニコライの歩み』の中の文章の一節を目にした時であった。

それには、「一八八〇年、ニコライがロシアに帰国し大聖堂建設のためにロシアの各地の有力者を訪ね歩いていた頃、プーシキン記念祭に出席するために、モスクワを訪れていたドストエフスキーが聖ニコライを訪ね、日記の中で『日本のニコライを訪ね、知り合いとなれて大変よかった。私が訪ねた事は彼らにとっても光栄であり、幸福なことと言ってくれた』（牛丸康夫訳）と書き記されている。」とあった。

ニコライとは山下りんをイコン画家へと導いた信仰の師であり、最も尊敬する人生の師

でもあった。

ドストエフスキーの日記には、更にドストエフスキー自らが「日本のニコライ」を訪ね、一時間にわたって話し合ったその印象を無邪気とも言える喜びの言葉で記されているという。聖ニコライの日本での伝教の功績がロシアでも広く知られ評価されていたのであろう。

ただ、ドストエフスキーと山下りんがペテルブルグで同時間を共有したということはない。ドストエフスキーが五九才の生涯を閉じたのは一八八一年一月二五日。山下りんがペテルブルグに到着したのは同年の三月一〇日。既に没後一ヶ月以上が経過しているのだから。

とはいえ、一九世紀末期のロシアを襲う政情不安、暗雲立ち込める不穏な空気、そうした近代化の波に揺れもがく時代の空気を共に感じていたのは確かなことと言える。

その他に、エカテリーナ宮殿、マリンスキー劇場でのバレー鑑賞、プーシキン文学カフェでボルシチを味わうなど盛りだくさんの観光スポットをまわり、私の七泊八日のペテルブルグの旅は終わった。「光と闇」の謎に包まれたペテルブルグの街は紅葉の秋を迎えようとしていた。

日本をめぐる

秋田・北鹿ハリストス正教会

私の故郷、秋田県大館市の中心部から東に六キロメートル、のどかな農村風景が広がる曲田地区。その一角にビザンチン様式の木造建築、ハリストス正教会聖堂が建つ。秋田杉を使った清楚なその建物は、最近ＮＨＫテレビの番組でも紹介され、美術関係者ばかりでなく建築関係者からも注目を浴びている。

この聖堂内には、ハリストス（キリスト）やマリア、天使の油彩イコン十九点が飾られ、そのうち十八点は山下りん制作によるものである。その中にはロシア皇太子ニコライに献上された「ハリストス復活」と同じ構図のイコンもあり、イコンを描きはじめた頃のりんの気迫が伝わってくるものばかりだった。

この聖堂の存在を知ったのは『女性画家列伝』を読んで以後のこと、高校時代通学エリアであったにもかかわらず、この聖堂のことも正教会のことも耳にすることはなかった。

日本におけるハリストス正教会の分布図を見ると西日本地区よりも圧倒的に東北地区、特に仙台藩、南部藩のあった宮城県、岩手県に集中していることが分かる。秋田県ではこの北鹿曲田聖堂が唯一の正教会なのである。それは日本の幕末の政変と大きく関係していたのだった。

ニコライ主教が初めて日本の地を踏んだ一八六一年〈文久元年〉の函館は、新政府軍と旧幕府軍の最後の決戦場となったところ。敗北する幕府軍に主力として加わっていたのは仙台藩と南部藩の藩士たち。彼らは挫折と屈辱の中でニコライ司祭と出会う。感銘を受け生きる希望を得た者たちは、キリスト教禁令下に次々と洗礼を受け信徒となっていく。

北鹿正教会はこの時代、蝦夷警備のため軍医として出兵を命じられた者が、ニコライに日本語や日本の歴史について講義した縁からはじまる。ニコライの日本語に東北訛りがあったといわれる由縁である。

近代化から取り残され、飢饉に苦しんだ貧しい東北地方、そこに暮らす人々にとってハリストス正教会との出会いは大きな心の支えでもあった。

しかし日露戦争、ロシア革命による資金面の苦しさなどから次第に信徒も減り、第二次大戦下のキリスト教の苦難の時を経て、激減する。私が情報を得ることもその存在すらも知ることがなかった理由はそこにもあったと思われる。

しかし信徒たちの結束は固く、支え合い、励まし合い、今もなおその伝統を守り続けている。

函館ハリストス正教会

函館港から函館山にむかって延びる幾本もの坂。坂の上の元町に点在するエキゾチック

な洋館や教会、なかでもひときわ静謐さが際立つビザンチン様式の教会、それが地元の人たちから「ガンガン寺」と呼ばれ親しまれている函館ハリストス正教会である。

ここ函館は長崎、神戸、横浜と並び幕末後、外国に向かって開かれた土地。この教会跡は元々一八五九年、ロシア領事館内に聖堂を建立したのが始まり。日本正教会の歴史はここから始まったのである。

一八七二年（明治五年）、神田駿河台に日本正教会の本拠を移すまで、日本ハリストス教会は禁令下にありながら、ニコライを慕う人たちが次々と洗礼をうけたところ。この人たちが後に各地で布教活動を進める中心的な役割を担っていく。幕末の志士、坂本竜馬の従兄弟、沢辺琢磨が日本人として初めて洗礼を受けたのも、ここ函館ハリストス教会であった。

現在の教会は一九〇七年（明治四〇年）の大火で、最初の聖堂が消失して後、一九一六年（大正五年）に新しく建てられた煉瓦造り、白漆喰壁のビザンチン様式の教会で国の重要文化財に指定されている。

この聖堂にある山下りんのイコン画は「十二大祭図」と

呼ばれる十二枚組の小型版のイコンとロシア皇太子に献呈した同じ図柄（復活）のイコン、そして半身像の「ハリストス」と「マリア」のイコンである。

この「十二大祭図」はりん五十九才の時に制作したもので、この時既にりんは白内障を患い、視力が著しく衰え始めた頃である。しかし、まだ精力的に描いていた頃の北鹿曲田聖堂のイコンに比べてもその表情の豊かさ、滑らかな筆遣いは変わっていない。

私がここ函館ハリストス正教会を訪れたのは梅雨の季節も終わりに近づいた七月半ばの頃。前夜から朝にかけて降り続いた雨も上がり、教会の庭のバラの花が緑の庭に彩りを添える。庭を散策する人たちの会話に時々中国語が混じる。ここ函館にも大勢の中国人観光客が押し寄せているらしい。函館正教会の信徒は現在三百人程。四代、五代、六代と幾世代にもわたって受け継がれ、ともに支え助け合い、この教会を守り続けている。

函館正教会から十数メートル離れた海辺の丘に建つ外人墓地や南部藩士の墓は、訪れる人もなくひっそりと佇み、移ろい来た函館の歴史を語り続けている。

ニコライ堂（日本ハリストス正教会復活大聖堂）

御茶ノ水駅から歩いて二分、日本大学、神田古本街、湯島聖堂など文化財の香り漂う神田界隈の高台に建つニコライ堂。ここを訪れたのはソメイヨシノの季節が終わり、しだれ

桜がいっせいに咲きだす頃の四月一五日。

白壁に緑のドームとアーチのビザンチン建築様式の建物、まわりが高層のビル街にあって、その姿はひときわ威容さと静謐さを放つ。

ここニコライ堂は一八八四年（明治一七年）から九一年（明治二四年）までの七年の年月をかけ、大主教ニコライが日本各地の伝教の拠点とするために、ロシアからの援助により建設されたもの。この聖堂の建設以来、鐘の音が市中に響き渡り、東京一円のどこからでも眺めることができ、多くの人に愛され続けてきた。

歌人の与謝野晶子は、

ニコライの　ドオムの見ゆる小二階の　欄干の下の朝顔の花

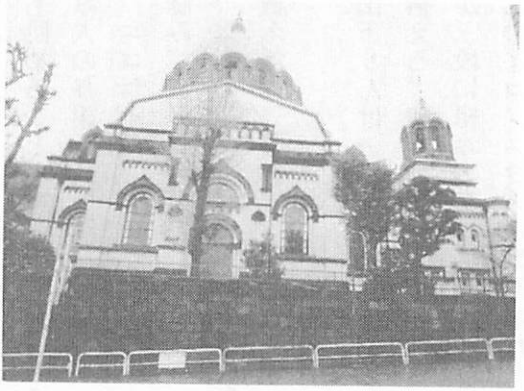
と詠み、宮沢賢治も、

霧雨の　ニコライ堂の屋根ばかり　なつかしきものはまたとあらざり

と讃えた。

山下りんは一八八三年、ロシアから帰国後敷地内の女子神学校の宿舎に住み、アトリエを構える。聖堂内のイコノスタス〈聖障〉は高さ七間、幅八間半、大小六十七枚のイコン画が三段に組み込まれた壮大なものであったという。

このイコノスタスに繋架されたイコンはペテルブルグの宮廷付きイコン画家の手による



もので、りんもまたニコライ主教に命じられ、描いたイコン二点が正面のイコノスタスの左右両隣に懸架された。さらに翌年には二点の大作が聖堂内に飾られ、その後描いたイコン画を合わせ、九枚が聖堂を飾る。

日本正教会の総本山であるニコライ堂。ロシアの有名なイコン画家のものと共に聖堂に繋架する絵を描くということ、それはりんにとってどんなにか誇らしいことであっただろうか。

しかし一九二三年、東京を襲った関東大地震は無残にもニコライ堂に大打撃を与える。ドームは倒れ崩壊、聖堂内は火に包まれ、りんが丹精をこめて描いたイコンは消失し、灰燼に帰す。

この時期、既に笠間で晩年を過ごしていたりんのもとにもその報が届く。その時受けた衝撃、心中はどんなに辛いものであったろうか。

この日ニコライ堂を訪れている観光客らしい数人の若者たちが、正面のイコノスタスに繋架されている「十二大祭図」にじっと見入っていた。若き信徒かと一瞬思ったが、それは「ブラタモリ」というテレビ番組で駿河台界隈が取り上げられ、ニコライ堂が紹介され

たこと、二月にはＮＨＫ大河ドラマ「龍馬伝」で龍馬のいとこ沢辺琢磨（洗礼名　パウエル）が取り上げられたことにより、来堂者が急増しているのだという。

ロシアから帰国後、故郷笠間に戻るまでの三十五年間にわたり住み、二十八年間イコン画を描き続けたアトリエは今はなく、アトリエのあった場所は日本正教会を統括する事務所となり、固く鍵がかけられてあった。

ここニコライ堂は全国一万三千人あまりの信徒たちの宣教と祈りの拠点であり、今なお心の拠り所となっている。

山下りん資料館　―白凛居―　を訪ねて

関東平野の北東・茨城県の中央にあって、山岳丘陵に囲まれた小盆地。笠間焼、日動美術館、魯山人の別荘「春風山荘」など数々の観光スポットでも知られる笠間市。ここがイコン画家山下りんの生まれ故郷であり、晩年を過ごした町である。

山下りんの弟、峯次郎の孫で、山下りんの研究者としても知られる故小田秀夫氏の自宅跡に資料館「白凛居」が建てられたのは三年前の二〇〇七年。小田氏の遺言により、亡くなられて二年後のことである。

小田氏の身内の方々によって運営されているこの資料館の開館日は月に三回。仕事の日程をやりくりし開館日に合わせて白凛居を訪ねたのは、関東も梅雨入りしたばかりの六月

一九日。

地図をたよりに小さな路地が入り組んでいる住宅街を車でぐるぐる回ること二十分。突然目に飛び込んできたのは瀟洒な薄いブルーの二階建て住宅。もしやと車を止めてみると、玄関脇に小さく「白凛居」と書かれた表札があった。

この日予約した私たちを待っていて下さったのは故小田秀夫氏の次女の笹目弘子さん。現在白凛居と同じ敷地内に住まわれている。ここは小田氏が所有していた山下りんの日記や氏の研究資料、山下りんの描いたスケッチ、下絵、模写画、銅版画、記名入りのイコン画などを保管、管理するために建てられたものである。

二階建てのこの建物は一階が事務室とギャラリー、二階がプライベートルームとなっている。一階のギャラリーは十六畳程。事務室は十畳程と清楚でこじんまりとした造りである。

ギャラリーに飾られている山下りんの絵は修業時代の浮世絵、工部美術学校時代のデッサン、ロシア時代の模写画、イコン画の下絵、風景画、銅版画など三十点以上にも及ぶ。いずれの絵からも写真で見るのとは違い、遠近法のあるふくよかな表情の人物像、光と影のタッチの力強さが伝わってくる。特に当初から手元に置くつもりで描いたとされる「ウラジミールの聖母」のイコン画は、赤味を帯びたふくよかな頬、幼いキリストを抱きしめるマリアの慈愛に満ちた表情などイコン画とは思えないほど、人間味にあふれている。

この作品は生涯結婚することも、子をなすこともなかった山下りん四十四才の、イコン画家としてもっとも充実していた時のものである。この時、りんはどんな思いでこれを描いていたのだろうか。この「ウラジミールの聖母」はロシアイコンの中でも最も有名なものとされているものである。

全国各地の教会に飾られているおよそ三百六十点にも及ぶイコン画は、元々ロシアのイコンが原型とされている。しかしその絵はギリシャ絵として嫌った原理的な絵を踏襲するのではなく、表情豊かで優しさに満ちた山下りん独自のイコンである。

ギャラリーを一巡した後、これまで、山下りんの住居がまだ残っていた頃、小田氏の許を訪れた人たちやその人たちとの触れ合いのエピソードを、アルバムを広げながらお話をしてくださる笹目弘子さん。

ＮＨＫ「わが心の旅」でペテルブルグを旅した吉永小百合さん、作家の田中澄江さん、太田治子さん、美術関係者ら著名人の写真の中にアウグスタさんを発見。一九九八年から九九年にかけて開催された「山下

りんとその時代展」のために来日し、ここ笠間にも立ち寄られたのだという。

アウグスタさんとお会いしたのは昨年の九月。もう十カ月も前のことである。思いがけない「再会」にペテルブルグでのアウグスタさんの優しい気遣いがなつかしく思い出される。

五百坪にも及ぶ敷地内の一角に建つ白凛居。その前庭の木々は梅雨の季節の恵みを受けて、つややかな緑に覆われている。季節折々の花々、彼岸花、ソメイヨシノ、しだれ桜の彩りが訪れる人の目を和ませてくれるという。

晩年、作物を作り庭の手入れを楽しみ、過去を語ることもなく、自然とお酒をこよなく愛した山下りん。残された遺品の中から、その豊かな才能を導き出し、美術史の中に位置づけ、イコン画の解明に大きな役割を果たされた故小田秀夫氏。その小田氏のおもいを受け継ぎ、個人の名誉や栄誉のためではなく、その業績を後世に伝えようと笹目さんら家族の方々によって建てられた白凛居。山下りんは今でもそこに生きて、私たちに語りかけている。「生きることとは、描くこととは」と。

生きるということ、描くということ

自分の履歴のはじめに「生来画を好む」と書いた山下りん。りんの生涯は自ら語るように絵を描くことを貫いた人生と言える。女性がひとり、自分の意思で生きていくことの困難な明治の時代、何がそこまで彼女を思い詰めさせたのだろうか。

幼いころより絵に親しみ、十五才で家出。上京した後は短い間に次々と師を変え、決して豊かでなかったにもかかわらず美術学校にまで入学する。意に染まらず中退して二ヶ月後にはロシアに留学と、思い詰めたらひとすじに決断していくその潔さ。しかし勝気で負けず嫌いのりんは、生きるということはそんな単純なものではないということをロシア留学で十分に学んだはずである。

帰国後、留学時代に無理やり描かされたギリシャ絵の反動なのかイコン画から離れ、銅版画や石版画といった西洋絵画の道へ進む。が、そこでも自分のもつ才能を十分に生かしきれない不満やもどかしさを抱え込んでいたのだろうか。七年後、西洋絵画を経てイコン画に戻る。りんが描いたイコンはロシアのイコンをモデルにしながら、それは決してギリシャ風ではなく、ふくよかな面立ちのイコンであった。それは西洋でもロシアでもなく、ふたつの文化を融和させた、りん独自が導き出した世界である。

悩み、もがき、苦しみながらたどり着いた自己実現の道。祈ること、仕事をすること、

自分の個性を表現すること、それらはりんにとって何ら矛盾するものではないと思い至ったのではないだろうか。　自ら描いたイコンの前で祈りを捧げる人々に思いを巡らす時、神への祈りを共有することの喜びと誇り、それがイコン画家山下りんを支えていたのではないだろうか。

近代化と古い体制のはざまに苦悩する一九世紀後半のロシアと日本。この時代を駆け抜けたイコン画家山下りんは今なお、描くということ、生きるということの意味を私たちに問いかけ続け、私の前にいる。

【参考資料】

「山下りん　明治を生きたイコン画家」　木下智一著　北海道新聞社
「山下りんとその時代展　日本～ロシア　明治を生きた女性画家　山下りん」　読売新聞社
「魂のイコン　山下りん」高橋文彦著　原書房
「われら生涯の決意：大主教ニコライと山下りん」川俣一英著　新潮社
「山下りん」　小田秀夫著　日動出版部
「山下りん　黎明期の聖像画家」鹿島卯女編集　鹿島出版会

「日本正教会の歴史」　日本ハリストス正教会教団
「明治期日本の文化における東方正教会の位置および影響」アレクセイ・ポタポフ

※掲載写真について

27ページ　「ハリストス復活」（エルミタージュ美術館蔵）
『山下りんとその時代展』図録より
29ページ　山下りん　白凛居図録より
43ページ　ノヴォジェーヴィチ復活女子修道院にて
51ページ　函館ハリストス正教会　イコノスタス（聖障）　同教会絵はがきより
54ページ　東京御茶ノ水・ニコライ堂
57ページ　笠間・白凛居にて

ょうが、実際、海抜すれすれの街はたびたび洪水に見舞われており、同地を舞台とするドストエフスキーの名作「罪と罰」のクライマックスの場面にも、洪水が背景に使われているとのことです。
亀山氏は、最後にその「罪と罰」のせりふを読み解き、同書に込められたドストエフスキーのメッセージを提示されました。
ほぼ２時間の講演中、プーシキンの詩をロシア語で朗読されたり、メドベージェフ大統領に会った時のエピソードを挟んでくださったりの〈贅沢〉な講演で、１７７名の参加者は時空を超え、今昔のサンクトペテルブルグを旅している気分を楽しみました。

「またこういう機会を」

参加者からの感想も１００枚ほど集まりました。いくつかご紹介します。●良かった！おもしろい!!カラマーゾフは読んだ。罪と罰を読もう。●ロシア文学と私の生活はかけはなれた距離にあります。その非日常の世界に亀山先生は誘ってくださいました。とても素敵でした。●立川でこのような講演会が催されたことにとても感激し、主催者、亀山先生にお礼を申し上げます。大学の講義を聞いているようなワクワクした気持ちであっという間の時間でした。続きがまたありますことを願っています。勿論、カラマーゾフの兄弟は読み、ロシアも崩壊前に訪れたこともあるので、お話もいろいろな思い出と共に拝聴いたしました。●先生のお話にひきこまれました。実体験にもとづいた臨場感あふれる説明にレニングラードの様子が目に浮かびました。レニングラードの名前の方が私にはなじみがありますが、歴史のこともあらためて知りました。ドストエフスキーやトルストイは大学生の時に読んだだけでしたが、あらためて先生の訳で読ませていただきます。等々

亀山氏にお送りしたところ「今日、参加者アンケートを受けとりました。すべて目を通しました。慣れない講演ながら、これだけの反応がいただけましたことを心よりうれしく思っております。また何かご縁がありましたら…」と返信をいただきました。
ご講演いただきました亀山郁夫氏、ご参加の皆さま、ご協力団体、ご後援頂いた立川市教育委員会にお礼申しあげます。（原）

講演会「ドストエフスキーとサンクトペテルブルグの迷宮」　講師　亀山郁夫氏

「山下りん」の追跡が、思いがけない講演会開催につながりました。

本文でも紹介したように、山下りんは１８８１年３月にイコン修業のためサンクトペテルブルグに留学しています。調べていくと、それを遡ることわずか２カ月、ロシアの大文豪ドストエフスキーが同地で急死していることが分かりました。

りんが降り立ち、ドストエフスキーが執筆活動をしていた１９世紀後半のサンクトペテルブルグ。いったいどういう街だったのでしょうか。そのあたりのお話を伺いたいと、ドストエフスキー作品の新訳を次々と出していらっしゃる亀山郁夫氏を講師に迎えて、１１月６日午後、立川市女性総合センターアイムホールで、少し贅沢な（?）講演会を開催することになりました。

「サンクトペテルブルグは空となるべし」

亀山氏はウォーミングアップも兼ね（?）、自著「ドストエフスキーと５９の旅」から選んだエッセイの朗読から始められました。

ロシア人にとって正統な都はモスクワで、サンクトペテルブルグはあくまでも異端の都であったとのこと。１８世紀に西洋を模し、大変な犠牲を払って造成したサンクトペテルブルグですが、１９世紀になると、解放農奴が流れ込み人口が急激に膨らんでいきます。そこに流布したのが「サンクトペテルブルグは空となるべし」という箴言。街全体の言い知れぬ不安感で広がったのでし

遠い記憶の旅

ふるさと青森の〈ボド〉抄

草場　弘子

田中コレクションとの出会い

先日帰省した折り、生家に近い町に住む妹に聞いた。

「最近、うちの辺りにも〈ボド〉や古い民具を探して、訪ねてくる人がいる」と。

衣料としての役割を終えて土に帰るのを待つばかりだったものが、たまたま仕舞い込まれて今日も土蔵の隅に眠っているかもしれない〈ボド〉。

国の重要有形民俗文化財に指定されて世に知られることになった田中忠三郎コレクションの中で目を覚ました〈ボド〉の類は、やれ「本物のエコロジー」とか「奇跡のテキスタイル・アート」と囃たてられ、〈BORO〉の名を冠されて好事家の目にとまり、過疎化の止まらない各所の集落に小さな波紋を起こしているらしい。

かつて私の故郷青森の農山村の女たちが、家族のためにひたすら手をかけて作り上げたのが、麻の仕事着や常用着である。

過酷な冬の寒さを凌がねばならない北国の人々にとって、着ることは食べることと同じくらいの死活問題だった。家族に衣服（センタク）を用意し管理することは、女の仕事だった。農作業や家事、育児に加えてこの仕事である。麻を育て、刈り取り、繊維を取り出し、糸を績み、縒り、布に織り上げた。得た布は小さな切れ端や糸屑さえも大事な財産だった。

栽培が出来て、採取や加工が比較的楽だとは言え、この麻布は撥水性がよく織り目が粗いという性質を持つ。だから夏場に着るには風通しがよく涼しいが、冬場にはいかにも寒い。そこで保温と補強とちょっぴりの装飾のために、少しだけ

手に入るようになった木綿糸を惜しみながら常用着や仕事着に刺し綴ったものが青森の刺しこである。

日本の農民が用いた刺しこの中でも、この藍（南部では浅葱色が主流）で染めた麻布に、白や藍色の木綿糸で独自な模様を展開させながら刺し綴るこの地の技法は、多様さと完成度の高さにおいて他に類を見ないと言われる。

地域性と独自性から、津軽のコギン刺し、南部の菱刺しの流れとなってそれぞれの地に定着してきた。大正末期に民芸運動を展開していた柳宗悦らによって見出されて、高い評価を得て世に知られることになったが、以来伝統工芸としてその技術が愛好者によって今に受け継がれている。

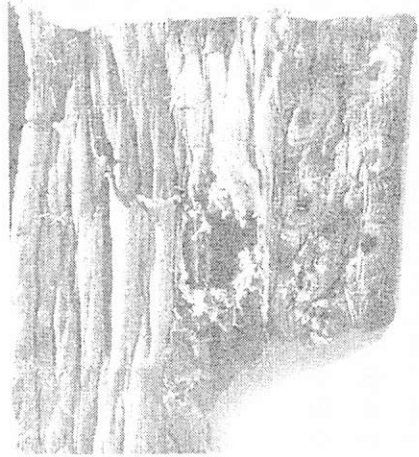
それまで下北アイヌの調査や縄文遺跡の発掘調査をしてきた地元の民族学者田中忠三郎氏が、県内の衣服や民具の収集と調査に乗り出したのは一九六五年（昭和四〇年）からで、その膨大な収集品の一部七八一点が「津軽、南部の刺しこ着物」として国重要有形民俗文化財に一括指定されたのが一九八三年（昭和五八年）のことである。

ボド・ボド・ボド…

<ボド>は、指定された七八一点の中には入っていない。

東北の農民の貧しさの象徴、とことん着尽されてあとは土に帰る日を待つだけの代物と見られ、<ボド>に文化的価値を認める人など殆どはなかった中で収集された品々である。

これは麻の刺しこの衣類を使い込んで古くなったものに、さらに継ぐ、接ぐ、刺すなどの手が加えられて着続けられて来たり、これらをほどき古手木綿を組み合わせて再生させた衣料品で、<ぎりぎりまで手をかけて、さらに使い続けられた物>程度の意味合いを持つ。



「アミューズ ミュージアム」の展示紹介パンフレットより

だから<ボロ>と括るには違和感があって、「あれはやっぱり<ボド>だよね」という言う私に、すでにコレクションを見ていた妹も同調する。

私の生家は代々の農家である。リンゴ生産地帯だったため、人手も畑地もそちらに向けられたからだろうか、この地域での麻栽培は明治半ばに終わっている。母の世代は麻の栽培や機織りはしていないはずである。おそらく常用着や仕事着は上方から来る古手木綿に多くを頼り、祖母たちは暇を見ては針を動かし、<ボド>も繕ってきたに違いない。

…それから祖父たちは又畑へ出ていき、祖母のキトは囲炉裏の端で小布や筒袖の袖の野良着や子どもたちの上着を縫ひます。古くなった上着や肌着を潰しては、それを何枚も重ねて裏地にし、刺し子を刺しなおして上着に縫いつけていくのです。家族の一人が少なくとも夏に二枚、冬に二枚の上着を持つとして全部で四十枚以上になりますが、家族の着るものを縫ふだけで過ぎていく幾千もの昼と夜は夢でなく、まさに筒木坂の、生活と云うものでありました。當時、野口の人びとはみな二番刺しの質素な上着を着てをり…

（高村薫「晴子情歌」より）

一九三四年（昭和九年）当時の、西津軽の新田地帯の中農の様子である。

生家を建て替えたのは、私が二歳の頃だという。既に祖父母もなく、長い役所勤めをした父の意思で、建て替え時に古い物は思い切り処分されたのだろう。育った家の中にそれらしい物は無かった。

だから田中コレクションの<BORO>を見るまでは、<ボド>　と呼ばれていたものの存在は、すっかり忘れていた。

コレクションは圧巻だった。一点一点が強いインパクトで迫って来る。後世に残すことなどつゆほども思わず、家族が何とかこの冬を暖かく無事に越えてほしい、そのこと一つに執着して古布を手にした女たちの思いが私を包む。

例えば

- **丹前型の夜着**　本体の生地が分からなくなるほどランダムに継ぎに継がれ、刺しに刺されて三代、四代と着継がれて来た丹前型の夜着。綿が手に入り難い人々の、「少しでも暖かく」の思いで少量の綿と共に麻屑（オクズ）や小布が縫いこまれ、一〇kg前後の重さに及ぶものもある。

●**敷布、炬燵掛け（夜着兼用）**　解いた麻の小布を始め、古手木綿や裂き織織りの端切れに紛れて、手拭いや商店の半天と思しきものまで継ぎ布となって納まっている大きな四角い布。何十枚もの布が継がれ重ねられ刺されている。

●**袖なし**　身ごろにコギン刺しをした晴れ着は、やがて裾を切られた筒袖の仕事着になり、それから袖を外されて袖なしになる。

●**仕事着**　古手木綿を細く引き裂き横糸にして、麻を経糸にして織ったもので、ていねいに刺しこが施されている。防水・防寒性に優れているので「一枚あれば末代もの」と言われる日本海沿岸の海の仕事着。繕われて、何代にもわたって着られて受け継がれた。

●**シャツ**　メリヤスシャツの原型を残しながら、裏表共に肩、肘、袖口、裾廻りと補強のための古手木綿を何枚も貼りつけて刺しこを施している。まるでパッチワークの源流を見ている思いがしてくる。

●**子ども服**　赤ん坊の肌着は、着古して柔らかくなった白の古手木綿の合わせ仕立て。破れは中布を入れて細かく繕い、赤い一筋の紐が彩る。

●ある老婆が遺した、風呂敷いっぱいの夥しい大小の古布たち。

会場を巡っていくうちに、私の記憶の底から立ち上がってくるものがあった。
「どこかで見たことがあるような…」「確かに誰か着ていたような…」

幾重にも継がれた丹前（「みちのくの古布」より）

<ボド>のなかに、菱刺しやコギン刺しの手法を見ることは殆どない。
継ぎ布として古手木綿を多く使うようになったため、ただの地刺しが多くなったのだ。古手木綿の絣模様や多様な染色布では、模様刺しは活きない。

麻から木綿へ

遥かな昔から、ヒトはその地に生きた証しとして衣・食・住の気配を残していることが多い。
県内にある大規模な縄文遺跡三内丸山でも、出土した種一粒、土器一片、繊維一本…それ

ぞれが時代を超えて、訪れる人に生き生きと語りかけてくる。
私は赤い漆が微かに残る縄文ポシェットを見て、それを愛用した人たちに似合うキモノ（着るもの）を思ったものだった。みな一様に夏場は殻付きピーナッツ風、寒くなればまた一様に毛皮だけだった訳ではあるまい、と…。
ここでは麻の種も見つかっている。麻の故郷中央アジアからどんなルートを辿って来たものか。おひょう、科（しな）のき、藤等の樹皮と共に、麻も北の地に生きる人たちの衣を早くから支えていたことがわかる。

一方、綿が暮らしの中に入って来たのはずいぶん遅れた。
日本に到来したのは平安朝の初めとされているが、綿の種がポルトガル人によってもたらされたのは一五一四年（天文十年）、本格的に普及したのは秀吉の朝鮮出兵（一五九二年・天正二〇年）の際に、その技術を移入促進させてからの江戸初期からである。
そこで各藩は競って綿花の栽培を行ったが、秋田、津軽、南部の各藩は寒冷地であったがため、綿花は育たなかった。

やがて多量の木綿が諸藩から大阪に集中して、日本海廻りの船で北国三藩にも入ってくるようになったが、あくまでもこれは武士と裕福な商人など一部特権階級用であって、一般庶民には木綿衣禁止令（一七九九年・寛政十一年）の布告さえ出ている。

一、去る辰年の御禁を破り木綿合羽等用いるものあり不届き、衣食住の奢りをやめ凶作に備え、雑穀等心懸くべく…趣意に反くときは肝煎老名組頭親類組合の者迄不調法被仰付

この布告が無かったとしても、新品の木綿を暖かく着られた庶民は殆ど居なかっただろう。繰り返し襲い来る冷害、洪水、大雪等に領民は命の危険に晒されながら辛うじて、生きる日々だったのだから…と見るか、庶民はすでに木綿の魅力を知り、入手するだけの力をつけて来た事に為政者として危機感を抱くようになり、布告をもってけん制したと見るか。庶民の方が結構したたかかもしれない。

繰綿の購入につき申立（一七五四年・宝暦四年　弘前丁藩日記）には、

上繰綿六貫目入り五〇本　今大阪で買い整え来春一番船で運び、秋田で製品に作り上げるので、引き続き取り立てて頂きたい、等とある。

もちろん武士と特権階級用である。

古手木綿から木綿の時代へ

古手木綿が北前船で運ばれ始めたのは、江戸中期と言われる。大阪から瀬戸内海を経て、日本海沿岸を回り北海道へ向かう北前船の下り荷の中でも、塩、茶、砂糖と並ぶ売れ筋商品の一つであった。

古手木綿とは、上方で着古された古手（古着）の着物や<ツギ>と呼ばれるその端布である。五、六貫入りの米俵に詰めて運ばれて来る<タバネツギ>を、行商の<タベト>を経て手に入れ、五，六人で分け合った。中身は雑多で傷みや汚れのひどい物も多く、米のとぎ汁や灰汁で洗って使った。

状態のよい<ノシツギ>は繋ぎ合せて着物を縫ったり、麻の着物の継ぎあてにした。

状態の良くない<サギ>は細く切り裂いて裂き織の横糸とした。

こんな物でも貨幣流通の枠の外にあった北国の人達にはまだ本当に貴重なもので、手に出来た人は限られていた。

ボドを構成していった布は、この古手木綿の<ツギ>の数々だった。

この地に庶民の手に入る木綿が出回り始めたのは、一八九二年（明治二四年）東北本線が開通し、流通形態が海路から陸路へも広がってからである。

日本の綿栽培はますます盛んになり、大正期に入ると、綿布生産高が世界の三分の二を占めるまでになった。

それでも青森の人たちにとっては、相変わらず高価な買い物である。南部を中心に麻布織りがなおしばらく残ったが、それもやがて昭和の声を聞くと共に消えていった。

しかし完全に消えたのは、戦後三年目（一九四八年・昭和二三年）に大麻取締法が発令され麻の栽培が出来なくなってからである。

安価な木綿が豊富に普及して、主婦たちは厳しい衣服（センタク）の管理からは解放された。

この地にあった「センタク渡し」という言葉もなくなった。

古手木綿の最後の市場は、青森と北海道だったそうであるが、女たちの<ボド>刺しが終わってそれもなくなった。

私の中の<ボド>たち

この稿を考え始めてから、すっかり忘れていた昔の記憶が少しづつ、次つぎと立ちあがって来た。

① 母が麻を育てた話

「夏は麻が一番」と言いながら、ユニホームのように紺の無地の上下に着替えては、りんご畑に出かけて行った暑がり屋の母。その他の季節には何を着て働いたのだろう。村の人たちがよく着ていた紺絣の母は私の記憶にはない。

「もう作れないと言うからね」と、びっしりと高く伸びた麻畑を見上げてつぶやいていた母。

村はずれの家からいつも通いで来ていた石岡の小母さんと並んで、苧引台を前に苧引金を使っていた母。

ちょっと嬉しげに新しい紺の麻布地にはさみを入れていた母。

おそらく一九四八年（昭和二三年）大麻取締法発令の前年と当年の事だろう。私は小学二年だ。績む、織る、染める工程は何処かに出したのだろうが、忙しかった母が自分のために拘ったこの行動は、何だったのだろう。

母には麻栽培の経験はなかったと思うのだが。

②　アバの仕事着

石岡の小母さんはアバと呼ばれていた。アバは働き者だった。自分のわずかな畑は、朝早くに済ませて来るのだと言っていた。

村はずれには、ほやほやの分家とか、引き上げてきた家族とか、他所から来た人等が住む一角があった。アバも家族とその中の一軒にすんでいた。一度見た家の中は簡素で、つましい暮らしである事は、子どもの私にもわかった。

アバの仕事着は、いつもすっきりとした紺絣だった。

モンペ、上着、袖なし、前だれはどれも平凡な紺絣だが、みんなと違っていた。もんぺはかなり細身、上着は和式の襟付きで袖もかなり細身。前だれと袖なし、手甲脚絆には細かい刺し縫いを施し、手甲の縁は色布でくるみ色布の紐の時もあった。袖なしの裏は小さい色布を沢山接いであった。

「アバはいつもシャキッとしていたね」妹も述懐する。貴重な布を無駄にせず機能的な昔からのデザインだったし、上手に継布を当てて、きれいに刺し縫いした<ボド>だったらしいと、今は思える。

どうしてあそこに住むことになったのか。母も語る事はなかった。

③　西隣のばっちゃの腰ぶとん

西隣のばっちゃは、その頃寝たり起きたりの日々だったようだ。
私はその家の一つ違いの女の子と、日当たりのよい庭先で遊ぶ事があった。
そんな日はばっちゃも気分が良いのか、外に出てきて通る村人に声をかけたりしていたのだが、いつもばっちゃの不思議な恰好に目が行ったものだった。地味な色目の筒袖の長着には、継ぎも当たっていたような気もするが特別な印象がない。目が行くのは素足に下駄をはくような季節であろうと、常に腰に巻きつけていた妙なものである。
それは大小さまざまな古い端切れを縦横に繋ぎ合せた布で、どでっとした厚みもあり、何か薄汚れた印象があった。これは「腰ぶとん」と呼ばれる<ボド>で、昔から腰を病む北国のばっちゃ達には必需品だったと聞いた。横幅は腰ひとまわり分、縦は四五センチ位か。古布を何枚も重ねて刺したり、薄く綿を入れたものもあるという。
やっと思い出したものだが、間近で見ていた<ボド>らしい<ボド>の一枚である。

④ 綿（わた）

寒冷のため綿花の育たないこの地では古着の綿入れを買い、そこから抜いて使ったと言われるが、さぞや貴重なものだったろう。

生家でも夏になるとアバや手の利く姪を呼んで、布団の仕立て直しをした。古綿は決して捨てられることなく小さな物もまとめて打ち直し、それをもとに新しい綿を足しながら布団に仕立てた。

冬の間だけ町の下宿に移る時も上京する際の荷の中にも、その夏仕立てなおしたふかふかの布団を入れてもらった。

遥か昔に北前船で運ばれた古綿のひと筋が、今わが家の押し入れの布団の中で眠っているかも知れない。

【参考文献】

「青森県史　青森県

「みちのくの古布の世界」田中忠三郎著

「晴子情歌」高村薫著

森のキコおばさん

やなぎまちてるこ

若葉の森に建つ
一軒の山小屋
ネコのトトと　キコおばさん
仲良く住んでいる

リビングの窓から
コナラやカラマツ
アカマツの木々
新緑のグラデーションが見渡せる

キコおばさんは考えて

窓の側のコナラの数本に
手作りの餌場をかけた

ヒマワリの種を置くと
鳥やリス達が
朝から夕方までつぎつぎと訪れる

まるっこいボスリス
赤足のアカリス
子リスのチビリス
シジュウカラ
ヤマガラ

カワラヒワ
スズメ　カラス

カラスの鳴き声が聞こえると
小鳥達は
急いで飛び立って行く
毎日見ていても見飽きない
窓の外のドラマ

そして　キコおばさんが
いちばん　感動するのは
アカゲラが餌場に飛んで来た時

歌舞伎の隈取(くまど)りの色
団十郎ばりの粋な姿
コナラの木に　音高く穴をほる

ほり終わると
ヒマワリの種を食べに来る
ネコのトト
思わず身を乗り出して見入ってしまう

アカゲラの羽根の色は謎の謎
キコおばさんは
素敵な羽根に魅せられて楽しんでいる
森の山小屋は
静かに流れる時間に染まっている

「ハムケ　共に」

三人の在日朝鮮人女性へのインタビュー

原　和美

◆□◆

■悩ましい気後れ

在日の人と話をする時、気後れというか構えてしまうのはなぜだろう？お互い日本で生活し日本語で話しているのだから、もっと気楽に話せるはずなのに「在日です」と言われると、「ああ、そうなんだ」とか言いつつ、意識のどこかがググッと緊張してくるのを感じてしまう。

それまでは心からおしゃべりを楽しんでいたのに、これはいったいどうしたことだろう。みだりに相手の敷地に踏みこんではいけないぞとか、無知をさらけ出して失礼なことを口走らないよ

うにしなきゃとかという意識が湧いて来て、たちまちガラスの壁をはりめぐらせてしまう。その上、相手が朝鮮籍なのか、韓国籍なのか、それとも帰化しているのだろうかなどと、おおよそ気安いおしゃべりには不要なことがらが気になり、目の前の相手との距離感がつかめなくなってしまうのだ。

「在日だってそうよ。日本人には七〇%しか心は許さない。そう考えている在日は多いと思う。私だってそうだった」と友人の李さんは言う。李さんは五十代の在日女性だ。私たちの「つむぐの会」が、前身の「立川・女の暮らし聞き書きの会」として活動していた時、立川近辺に住む在日たちの聞き書きをしたことがあった。その折、何かと力になっていただいた李さんとは、それ以来かれこれ十五年ほどのつき合いだ。でも、会えば「元気?」と親しく話すが、それ以上はお互いに深入りしないという関係でずっと来ている。ふたりともさっぱりした性格というのももちろんあるし、私自身は日本人とのつき合いもどちらかと言えば淡白なので、李さんとの関係が特別不自然というわけではない。が、やはり自分の中で一線を引いてしまっている気もする。

しかし五十代も半ばを迎えて、在日を前にした時の、ほとんど一人相撲に近いこんな緊張感からは解放されたいと率直に思い始めてもいる。李さんは、「自分の中の線をこわしてくれる日本人に会って、揺らされるような衝撃があった。それ以来日本人とのつき合い方が変わった」と言う。過去において被害者であり、日本社会では少数者である在日なら、信頼できる一人に出会って日

本人全体への信頼を取り戻す、心を開くというのは「あり」だ。しかし反対の立場にいる日本人には、おそらくそういう形での心のほどき方はできないのではないだろうか。少なくとも私の場合は無理だ。

というのは問題は相手にあるのではなく、むしろ自分の中の「負い目」のような感情にあるからだ。そういう風に考えると私の「気後れ」を克服するには、やはり在日のことを少しでも知る以外に手がないのではないかという気もしてくる。少なくとも相手が在日であるがゆえの話題を出してきても、うろたえないぐらいの知識があれば、不必要な気遣いに捉われずに済むようになるのではないか…。

そんなことをとつおいつしながら、改めて辺りを見回してみれば、私たちが初めて在日に取材した十五年前とは、なんと世の中の「風」は違ってしまっているのだろう。たとえば、あの頃は通名（日本人名）でないと暮らしにくかった在日たちが、少しずつではあるが、本名（朝鮮名）で生活する人たちが出てきている。地域で差別されることを怖れて用心深く「通名」で生きてきた在日が、本名でも「生きていける」と感じられるだけの変化があった、言いかえれば、それだけ日本社会の在日に対する許容度が上がったということなのだろう。

こうした変化は、在日自身の努力や実績が土台となって生まれたものではあるが、「冬ソナ」現象といわれる韓流ドラマの人気や、本国・韓国の目覚ましい発展に後押しされているのは間違い

ない。次々とテレビ画面にあらわれる韓国俳優や女優への熱狂が、長い間、日韓にわだかまっていた政治的な壁まで、あっけなく突き崩してしまったかのようにさえ見える。今、若い世代は朝鮮、韓国由来のものは文化であれ、「在日」という存在であれ、「おしゃれ」という感覚で捉えて何ら衒（てら）いがない。過去にこだわって心をほどけない私の姿勢こそ、時代錯誤的なものなのだ。

しかし、それは韓国、その延長としての朝鮮文化の話であって、もう一つの朝鮮、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）となると、「風」はくるりと向きを変えて真正面から吹きつけているかのようだ。二〇〇二年九月、日朝国交正常化が期待された小泉元首相の訪朝に際して、金正日主席が日本人拉致を認めた衝撃は、あまりにも大きかった。それまでは融和的な論調だったマスコミも、すぐに非難報道に切り替わった。日本政府も厳しい経済制裁を開始し、以後、日本人の北朝鮮への嫌悪感は、かつてないほど強くなったように感じる。

しかし、厳しい経済制裁は彼の地に住む人たちの生活をいっそう窮乏させただけだし、非難報道が過熱して、朝鮮高級学校女子の制服であったチマ・チョゴリが切られるなど「拉致問題」のとばっちりを受けたのは、結局は弱い立場にある、罪のない人たちだったような気がしてならない。一〇年度から始まった高校無償化から朝鮮高級学校が一時外されるという差別的な扱いがなされたことも、そうした「とばっちり」と無縁ではないだろう。

北朝鮮、韓国、在日、さまざまな要素が複雑に入り組む状況のなかで、在日女性たちは何を考

え、生きているのだろうか。世代によってもずいぶん考え方に違いがあるのではないか…。私はいく人かの年齢の違う在日女性たちにインタビューすることを思いたち、まずは友人の李さんに連絡を取ることにした。

李さんへのインタビュー

■ハムケ（共に）

「今、私が考えていることが分かってもらえると思うから」とインタビューをお願いした私を、李さんはひとつのコンサートに誘ってくれた。京都在住のシンガーソングライターがメーン演奏をし、その後に彼女が作詞・作曲した「ハムケ（共に）」を披露するという。「ハムケ」？「共に」？ふたつの疑問符をつけながらステージを見守っていると、二十人程の人たちとともに登場した李さんが挨拶をして、こう話した。

「日本人はいつまで謝ればいいんだという気持ちだと思うし、朝鮮人はなぜ私たちは日本社会に生まれて暮らすのか、私たちの差別はいつまで続くのかという気持ちだと思うけど、『今、この社会に暮らしている現実から始まり、未来に向かって共に歩いていこう』という気持ちを込めてこの歌を作りました」

ハムケ（共に）
ハムケ　あなたとわたし
ハムケ　暮らすこのまち
聞こえてくるよハングルが　アンニョンハセヨ
チャンゴのリズム　ドンキタッタクン
カヤグムのひびき　トウンギタンダンドウンチマ
チョゴリの子どもたち　あなたの笑顔
わたしと違うあなた　あなたと違うわたしが
日本で生まれ　出会い　共に生きるよろこび
ハムケ　ノレブルロヨ（共に歌おう）
ハムケ　ウリコロヨ（共に歩もう）
アブン　ヨクサ　イギョネゴ（つらい過去の歴史をのりこえ）
ウリ　チング　ヘヨ（私たち友だちになろう）

武蔵小金井で活動している「現代座」の座付コーディオン奏者が伴奏をし、明るい表情で歌う人たちの姿を見ながら、私の中では「日本人はいつまで謝ればいいんだと思っていると思うし…」で始まる李さんの挨拶の言葉がリフレーンした。

「…コンサート、温かいとてもよい会でしたね。（中略）『ハムケ（共に）』、もうすっかり覚えましたよ。李さんが冒頭で話してくださった『日本人はいつまで謝ればいいんだという気持ちだと思うし、朝鮮人はなぜ私たちがここにいなくてはいけないのかという気持ちだし…』は納得です。それを乗り越える言葉がきっと『ハムケ』なのだろうと思いました。

残念なことに過去の事実は変えられません。日本が百年前に朝鮮を植民地化して、多くの朝鮮の方の命を奪い、財産を簒奪した事実は変えることができません。どれだけ日本人が謝っても、それで朝鮮の方々の気持ちが納まるような怒りではないでしょうし…。

では、『日本人は謝る、朝鮮人は糾弾する』という関係だけでよいのかというと、日本人の私が言うと誤解されるかもしれませんが、それも寂しいなーと思うのです。過去は変えられない、でも現在、未来は変えることができるわけですから、同じ空間で生きている人（意に染まない理由であっても）同士が友達づきあいできないのは寂しいと感じています。それをハムケという言葉で在日の方から手をさしのばしてくださるなら、とてもうれしいし、その繋ぎ手に李さんがなって下さっているというのもダブルでうれしいと感じました。

たとえばシンガーの山本幹子さんの自在さがこれからは大切なのかもしれません。その意味でも歌や詩などで心をつなぐ会のあり方…共鳴しました。文化には人をつなぐ力がありますね。そうそう、おいしいお料理にも！

今年は韓国を強制併合して百年という日本にとっても朝鮮にとっても重い年ですが、立川近在の年代も立場も異なる在日女性たち数人にお声をかけ、お気持ちをお聞きして私なりの刻印としてみようかと思っています。ご協力いただけるとうれしいです。」（私から李さんにあてたメール）

それに答えて、彼女から電話があったのは、翌日のことだったか翌々日のことだったか。そのまま二度ほど電話でやりとりをし、再度、お会いしておしゃべりをした。そして、今彼女が一番力を入れている「ハムケ」に込めた想いを聞いた。

■「共に考えてほしい」

李さんは五年ほど前に父の故郷、慶尚北道の安東（アンドン）に旅したことがある。田園風景を眺め、その土地のご飯に舌鼓をうち、もし自分がここで生まれていたら、どんな少女時代を送っていたのかを、追体験してみたかったのだという。安東は麻の織物の名産地で、李さんは祖母が若い頃に織った麻の生成りを少し持参した。そしてそれを土地の職人に見てもらいながら、そこで流れたかもしれない時間に思いをはせた。

李さんは言う。「土地を奪われ、言葉を奪われた傷はやはりとても大きい。癒えるまで何年もか

かるし、ひょっとしたら癒えることがないかもしれない。本当は奪った側が奪ったものを返して、元通りにするのがスジだと思うけど、日本政府はその努力をまったくして来なかった…。せめて奪われた言葉を回復しようとウリハッキョ（朝鮮学校）をつくったのに、政府は支援するどころか、ずっと差別してきた歴史がある。

今も、朝鮮学校には国からの助成金は全く出ていない。そのために親たちの経済的負担はとても大きくて、初級（小学校）と中級（中学校）で違うけど、授業料は月々一万五千円から三万円ぐらいかかる。それに教材費、通学費が加算されていくわけです。遠くから来ている子が多いから通学費もかさむし、兄弟で通うとなると月々十万ぐらいの出費になる家庭も多い。それに給食がなくてお弁当でしょ。

自治体によっては、保護者に助成金を出してくれる所があるけれど額はまだまだ少ない。先生たちも薄給で頑張って下さっているし、親たちも足りない分を寄付したり、バザーを開いて支えてはいるけど、いったいいつまで私たちはチヂミを焼いて、資金集めをしなくてはいけないのかと時々切なくなって、怒りが湧いてくる時があるのね」

十五年前、在日へ取材した折に、立川錦町にある「西東京第一初中級朝鮮学校」を訪問したことがある。その時、校長先生は「もし祖国が統一されたら、我々は帰国する」と熱く語られたし、オモニ会の会長からは、学校支援のために代々のオモニたちがどれほどの苦労をしてきたかを

切々と話していただいた。その後、いくつかの本を読みながら、子どもたちに朝鮮語を学ばせるということが、在日にとってどんなにか重要であり、朝鮮学校抜きにしては在日の歴史も語れないということを、私も遅まきながら了解した。

一九四五年八月一五日、朝鮮人にとっては解放記念日であり、光復記念日とも呼ばれる日の直後から、在日たちは「金のあるものは金を、力のあるものは力を、知恵のあるものは知恵を」を合言葉に、各地で国語講習所や朝鮮学校をつくり、子どもたちに朝鮮語を学ばせようとした。立川の「西東京第一初中級朝鮮学校」も一九四六年に「立川初等学院」として起工されている。

しかし、戦後世界の情勢が東西対立の呈を見せ始めると、朝鮮学校の立場は次第に微妙なものになっていく。一九四八年、故国、朝鮮半島が不幸にも東西両陣営に分断され、「ふたつの朝鮮」が決定的になると、占領軍から日本政府を通して「朝鮮学校閉鎖令」が出された。当然のように在日たちは全国で抗議行動を組織し、中には神戸など暴動に発展するほど激しい運動を展開した地域もあった。しかし「閉鎖命令」を完全に覆すことはできず、多くの朝鮮学校が閉鎖され、自主運営や東京のように公立高校となって凌ぐ、などの厳しい状況下に置かれた。だから一九五五年に朝鮮総連が結成されると、総連は「いの一番」にウリハッキョ（朝鮮学校）の再建に乗り出した。そして学校法人が運営する「各種学校」という体裁をとって、朝鮮学校を再建し軌道に乗せたのである。

しかし「各種学校」扱いは自主的な運営や自由な教育には適しているが、私学助成がなされない、高卒認定が得られず日本の大学受験資格が得られないなどの不利も抱え込んでいる。李さんたち保護者の支援や運動が常態化せざるを得ない理由がここにある。

「だから、『ハムケ』をつくったの」と李さんの話は、思いがけない地点に着地した。コンサート会場で聴いた「ハムケ」は朝鮮学校支援の歌にはとても聞こえなかったし、あの日の李さんの挨拶にも具体的な話はなかった。在日も日本人も同じ地域で生きる「隣人」として仲良くしていこうという「気持ち」を表した歌ではないのだろうか。

「今年は韓国併合百年で、先日菅さんが談話を発表したよね。あの時代のことを現在生きている人たちに謝ってほしいと言ってもしかたがないと思うのね。でも、現在起こっていることに対しては、私たちだれもが責任があるわけでしょう、たとえば、朝鮮学校が差別されていることに対してもね。だから、いっしょにおかしいことはおかしいと言ってほしい。朝鮮学校のことだから在日だけが考えればいいというのではなくて、日本人も自分の問題として考えてほしい、それが『ハムケ（共に）』なの」

…なるほど。実は李さんたちは、日本人の仲間とともに「ハムケ・共に」と名づけて、朝鮮学校の財政支援を主目的とする活動を、昨年の一〇月から始めていた。「ハムケ」はそうした活動を背景に持った歌だったのだ。

よく過去の責任を、その後の世代に問うことができるか、という議論がなされることがある。最近ではハーバード大学のサンデル教授がこの八月に来日し、東大で行ったいわゆる対話型講義の中で、「日本は東アジアに謝罪すべきか」「オバマ大統領は広島・長崎への原爆投下に責任があるか」をテーマとし話題になった。Ａｓａｈｉｃｏｍによると、「日本は東アジアに謝罪すべきか」という投げかけに対して、「祖父の世代の行為に責任はない」「生まれる場所は選べないのに、謝罪を強制されることには納得がいかない」という反対意見と、「前の世代を土台にして今の世代がある。当然責任がある」という何らかの責任を認める意見が会場から出され、大いに沸いたという。

李さんの考えはこうした二項対立とは、立場を異にするもののように私には思える。現世代に「過去」の謝罪はあえて求めない。だが「過去」によって「今」に問題があるなら、それは現在社会をつくっている私たちみんなの責任として、共に解決して行こうという考えだからだ。その主張は心ならずも過去に対して加害者の立場に立つ、日本の現世代にも受け入れやすいものであろうし、過去の重さの前に、間々、思考停止してしまう私たちの無力感をも払拭してくれるように思う。

在日に関しては朝鮮学校だけでなく、参政権や国籍、国籍条項、就職差別など多くの問題が現在も山積している。「今の問題を考えると、必ず過去にも目が行くことになる」と李さんはいう。

今、私たちができることを「共に」考え、行動することで、過去に責任を持つことができることを示唆されて、私の中にあった在日への負い目のような感情にも、あわあわと光が差し込んでいくような気がした。

■高校無償化からはずされた朝鮮学校

ここで李さんたちが、昨年旗揚げした「ハムケ・共に」の運動について少し補足したい。朝鮮学校の財政支援を目的として、一口運動を呼び掛けるささやかな活動であったはずの「ハムケ」だが、立ち上がり早々からフル回転を余儀なくさせられた。というのは、一〇年四月一日から実施された高校無償化制度に関して、その検討段階から朝鮮学校を除外する動きがあり、それに反対する人々や団体の受け皿となったためだ。「ウリの会」(立川朝鮮学校を支援するネットワーク)と共に、「ハムケ」も署名活動や抗議集会に連日飛びまわった。

三月五日「ウリの会」で対策を協議、署名活動、院内集会、記者会見など、とにかくやれる事は何でもやろうと決める。

三月七日「京都朝鮮第一初中級学校訪問・緊急報告集会」で、訴えと署名を集める。

玉川上水「ステッチ」にて。参加者四三名。

朝鮮高校排除問題の署名活動開始。院内集会に向けて、議員事務所に電話かけ等を始める。

(「ハムケ・共に」活動報告から)

今回は在日のみならず、日本人の団体や個人の反対も多く集まり、今年（一〇年）六月には芝公園から東京駅まで千二百人の抗議デモを成功させている。そうした運動の甲斐あって、政府から「外交上の問題は考慮しない」という言葉を引き出し、朝鮮学校も無償化の審査を受ける前段階までこぎつけていた。しかし、一一月二三日、北朝鮮が韓国の大延坪島を砲撃するという事件が起きると、「外交上の問題は考慮しない」との明言を翻し、「平和が保たれていたことが大前提。朝鮮学校の無償化を先送りするもやむなし」と政府は方針を大きく転換した。

日本社会の良識が問われているのではないかと感じる。

■国籍をめぐって

李さんの国籍は「朝鮮籍」である。在日の国籍や永住権については、日本人が見えない部分だけにとても興味があるところだが、インターネットや本で調べてみても実感が伴うほどには分からなかった。しかし調べるうちに、「客観的事実」と思っていた国籍が、実は国家の思惑そのものであることを知って心底驚かされた。詳しくは巻末の参考文献などで確認いただきたいが、李さんと国籍のエピソードを少しだけ書いてみたいと思う。

「百年前の韓国併合によって、朝鮮人はみんな『日本国籍』にさせられた。それが戦後、在日は『日本国籍』から離脱させられて、とりあえず与えられたのが『朝鮮籍』。だから、在日は自分の意志と関わりなく、二度も国籍を変えられた。『朝鮮籍』と言っても『北朝鮮』という意味では

ないし、実際、在日は南部や済州島の出身者が多く、北朝鮮が故郷ではないケースがほとんど。私の場合も戦後に与えられた『朝鮮籍』をそのままにしていただけ。」

一九六五年に日韓基本条約が締結されてからは、有利な協定永住権が得られた韓国籍に変える人が多かったから、李さんも何度も考え、やはり朝鮮籍を選んできたひとりというべきなのだろう。

確かに「朝鮮籍」は李さんが言うように、一九四七年「日本国籍を有する朝鮮人を当分の間外国人とみなす」という相当身勝手な「外国人登録令」が閣議決定されて、国籍欄に便宜的に記入されたもので、「朝鮮」は国籍ではなく記号もしくは用語にすぎないと考えられている。当時はまだ朝鮮半島に正当な政府がなかった時代だったのだ。しかしこれ以後、在日は日本国籍を持ちながら、外国人として外国人登録証明書の常時携帯、提示義務が課せられ、指紋押捺も義務付けられることになった。

そして一九五三年のサンフランシスコ講和条約発効前に出された「朝鮮人は講和条約発効の日をもって、日本国籍を喪失した外国人となる」という通達で、在日の日本国籍は正式に剥奪された。以後、「出入国管理法」と「外国人登録法」の二つの法律で管理される存在となるのである。

もうひとつ日本人には分かりにくい「永住権（日本に永住できる権利）」だが、以前は朝鮮籍、韓国籍で取り扱いに差があったが、一九八九年の難民条約批准を受けて、一九九一年に「日本国

との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」(略称　入管特例法)が制定され、在日韓国・朝鮮人の在留資格が一本化された。つまり一九四五年九月二日、日本が降伏文書に調印した以前から、引き続き日本に居住している、平和条約国籍離脱者は「朝鮮籍」、「韓国籍」に関わらず、その子孫にまで「特別永住権」が認められることになったのだ。以後、在日は法的には「特別永住者」と呼ばれている。

翌一九九二年には、「外国人登録法」自体も改正・公布され、悪評の高かった指紋押捺制度を「永住者・特別永住者」には廃止し、その代わりに本人の署名と「家族事項」の記入が求められるようになった。外国人登録証明書の大きさもカードサイズで携帯に便利にはなったが、依然として常時携帯義務はあるし、煩わしい更新手続きもある。

今回法務省のホームページで外国人登録証明書の見本を見てみると、背景に「桐の紋様」が配されていた。こうしたデザインになじめない人には、心理的な負担もあるのではないかと思えた。もっとも常時携帯義務は、二〇一二年の改正で特別永住者・永住者には免除されるという報道がある。また更新期間は、既に二〇〇〇年の改正で、「特別永住者・永住者」には五年から七年に延長されるなど、少しずつ改善されてはきているのだが…。

李さんは多忙のあまり一度更新手続きが遅れ、外国人登録証明書の期限を切らしてしまったことがある。その時は品川埠頭にある入国管理局にまで、更新手続きに出向かなければならなかったそうだ。「収監されるかもって、友人が心配してくれた」。もちろんそうしたことはなかったの

のだが、日本人と同じように生活をしていても、在日にはこうした煩わしさ、国外追放の恐怖が常にあることをリアルに感じた。

また、「朝鮮籍」ではパスポートが得られず、外国に行こうとすると「再入国許可書」（日本に再び入国することを許可する証明書）や相手国の観光ビザなど煩雑な書類をそろえなければならない。とくに北朝鮮と休戦関係にある韓国には、つい最近まで入国許可がおりなかった。多くの一世たちが夢みる故郷であったにもかかわらず、である。

■「国恥記念日」

テレビで、韓国併合百年を期しての、菅首相の談話を見た李さんは、若い人が「韓国併合」と聞けば、現在の韓国、「大韓民国」のことだと思うのではないかと感じたという。

当時（一〇〇年前）、朝鮮半島は全体が統一されたひとつの国「大韓帝国」であった。日韓併合は日本とこの大韓帝国の併合をもっての呼称である。「まさか」と李さんに応えながら、私の頭には、なかなか現代史まで手が回らない日本の学校の授業風景がちらりと浮かんだ。

朝鮮が日本に併合された八月二九日を、朝鮮の人たちは「国恥記念日」と呼ぶそうだ。「自分たちの国が、なぜ他国の植民地とされたのか、私たちもやはり反省して二度とそうしたことがないようにしようという記念日」と李さんは言う。そう言われると、日韓がこのような抜き差しならない事態に至った経緯、とりわけ大韓帝国側の事情を、私自身もまったく知らないことに気づく。

朝鮮半島最後の王朝となった李王朝が治めていた大韓帝国は、大国である清とロシアを後ろに控え、前には海を隔てて、明治以降「富国強兵」を掲げ急ピッチで近代軍隊を整えつつある日本がいた。独立堅持を意識すれば、細心で戦略的な外交と、伍していけるだけの国力の伸展が急務であったろう。

角田房子著「閔姫暗殺」には、日韓併合前夜の大韓帝国の様子が活写されている。閔姫と大院君の政権争い、それに乗じようとする周辺諸国、国民の疲弊にも国の近代化にも鈍感になってしまった李王朝末期の姿が、そこにはある。その後の悲惨と大きすぎる犠牲は言うまでもない。あの時代を、日本人は日本人の立場から、振り返ってみる必要があるのはもちろんだが、それと共に、たとえば、韓国映画の力を借りるなどしながら、朝鮮側からも振り返ってみるとよいのではないだろうか。それが在日や隣国の人々の思いに、少しでも届く架け橋となるのではなかろうかと思うのだ。

黄さんへのインタビュー

■木漏れ陽の玄関

在日が日本でどんなふうに歩んできたのか、一度きちんと聞いてみたいと思ってきた。しかし、

たぶんは苦難の連続であろう半生をお聞きするだけの勇気が持てない、ましてや友人には遠慮があって聞きにくい。そう思っていたら、黄（ファン）さんを紹介してくれる人がいた。「きっと苦労していらっしゃると思うけど、カラッと明るい人だから」。その言葉をたよりに、秋の一日、黄さんを昭島のお宅に訪ねる決心をした。

昭島市の東中神から西立川にかけては在日の家が多い。かつての立川基地（現・昭和記念公園）に近く、戦前・戦中は陸軍の官舎が並んでいた地域だ。戦後、軍が解散して空き家になった官舎に、帰国を待つ在日が移り住んだと聞く。黄（ファン）さんの家もそうした一画にあった。

木漏れ陽が落ちる路地をたどっていくと、黄さんの家の南向きの玄関につながった。声をかけると澄んだ声で返事があり扉が開いた。「ようこそ」「はじめまして」ふわっと包み込むような笑顔の黄さんを、私はいっぺんで好きになってしまった。

黄さんの話は、七月に行った北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）訪問のことから始まった。一九七二年に北朝鮮に「帰国」し、彼の地で医師として働いていた末の弟が亡くなったのだという。

北朝鮮への「帰国事業」は一九五九年からほぼ二十年にわたって実施され、九万三千人を上まわる在日が「祖国」に渡った。当時、北朝鮮は「帰国者には衣食住と就学を無償で提供する」と約束し、日本で差別と貧困に苦しんでいた若い在日の大きな希望となった。黄さんも「金日成主

席はひまわりのような希望をくれた」とこの時の喜びを語る。黄さんの弟は医師になりたかったが、日本では経済的に難しいとみて二一才で帰国、北朝鮮で産婦人科医となった。その実績を評価されて勲章もたびたび授与されている。

現在、空路で日本と国交がない北朝鮮に行くには、北京か瀋陽にいったん飛び、現地の北朝鮮大使館でビザを取ってから、平壌入りをしなくてはならないのだという。今回も「祖国訪問ツアー」の中に入って北朝鮮に行き、丁寧に弟の供養をしてきた。「墓参りの時、職場の人がたくさん集まってくれて…」と黄さんはしんみりする。在日の家庭にとって、北朝鮮は政治より何より、同民族そして家族や親せきが暮らす近しい地であることを肌で感じた。

■トラの上着を着たハンメ

黄さんの半生を伺うと、そのまま映画のシナリオになるのではないかと思うぐらい起伏に富んでいる。貧しさゆえのエピソードも多いのに、黄さんの口から聞くとなぜか明るい色合いが加味されて、聞こえてくるから不思議だ。

黄さんは一九四二年文京区の生まれ、今年六八才だ。父は全羅南道の順天（スンチョン）の出身。勉学優秀であった父は、市長に推薦されて来日し大阪の大学に学んだ。が、経済的なこともあって、勉学を途中で断念して上京後、タクシー運転手として働いた。

母は同じく全羅南道の光州に生まれたが、二才の時すでに家族と来日し、小石川に住んだ。建

設工事の親方として働いた祖父はいろいろな工事現場を歩き、黒部第三ダムの工事現場で不運に見舞われ事故死した。インターネットで見てみると、黒部第三ダムは戦時下の電力需要の増加に応えようと建設されたダムであるが、地熱が高く、摂氏一六〇度もの岩盤を掘り進む過酷な工事現場であったために、朝鮮人労務者を含む三百人以上の作業員が犠牲になったと記されている。不幸なことに黄さんの祖父もその一人だったのだろう。

両班（ヤンパン）育ちの祖母は、「女丈夫」という表現がぴったりの気丈な人だったが、それでも、事故死した夫の補償金がびた一文出ない中では再婚するよりほかなく、再婚して双子を産んだ。その時に痛めた腰がもとで、生涯片足を引いた。しかし、おしゃれで進歩的な考えを持つハンメ（母方の祖母）は在日にも日本人にも信望が厚く、知らず知らずのうちにいつも近辺のまとめ役を担っているような女性だったらしい。

「朝鮮の人たちは、新年と旧盆に目上の人たちに挨拶に行く風習があるの。うちのハンメとハラボジのところにもきれいな韓服に身を包んだウリ（同胞）たちがずらっと行列して、正月三日あいさつ客が絶えなかった。だからお料理もたくさん用意した」と黄さんは子ども時代の思い出を話す。このハンメにはまだまだエピソードが多いのだが、黄さんの父に声をかけ、自分の娘（黄さんの母）との仲を取り持ったのもこのハンメだった。

若いふたりが結婚し、翌年生まれたのが黄さんで、下に弟が三人できた。北朝鮮に帰国したのは一番下の弟である。黄さんが生まれた一九四二年はミッドウェー海戦で日本が敗北し、次第に

敗色が濃くなっていく時期に当たっている。東京もたびたび空襲に見舞われるようになり、四五年には黄さん一家も子どもたちは八王子の浅川近辺の朝鮮人部落へ疎開し、大人たちは保谷市（現・西東京市）の東伏見にあった中島飛行機の飯場に移り住んで仕事をすることになった。

幼い子と父母が離れ離れに疎開するというのは私には少し奇異に感じたが、血縁関係が濃かった在日たちの間では、おじやおばなど縁戚関係にある者が子どもたちの面倒を引き受けることが良くあった。この親子別々の暮らしも敗戦―朝鮮人にとっては「解放日（光復日）」―までで、黄さんは戦争が終わるとすぐに父母の住む東伏見の朝鮮人部落に引き取られた。

戦後は日本人の生活も苦しかったが、朝鮮人にはニコヨンと呼ばれる低賃金の土建仕事しかなく、黄さんの表現を借りれば「どん底」の暮らしだった。バラックのような家、食うや食わずの日々、差別。面白くない日々の憂さを、在日の男たちは暴力や酒で晴らそうとした。英語も日本語もできたインテリの父が、人一倍うっ屈した思いに苦しんだのは想像に難くない。父は憤懣のはけ口に賭けごとを選び、パチンコ、競輪、競馬で遊んだ。賭けごとの身を焼くような刹那感覚、勝てば人生を逆転できる可能性に、どん底の日々を忘れようとしたのかもしれない。運よくお金が入ると大盤振る舞いし、無くなると質草を入れさせた。

その父を傍らで支える母は父の悪口を言ったことがない人だったという。やはりニコヨンの日雇い仕事に朝早くから出掛け、一日厳しい労働をこなしていた母は、今、黄さんが思ってもとて

もきれいな人だったが、父が生きている間、笑った顔を見せたことがなかった。その必死な気持ちに胸が痛くなる。しかしそれだけではなく「アボジ（父）はお金が入るとオモニ（母）に、パーマをかけてこいというのだけど、きれいになった母を見て『誰に見せるつもりだ』と怒り出すの」という父の複雑な妬心も怖れてのことだったのかもしれない。

隣に住んだハンメ（母方の祖母）は得意の料理で飯場の賄いをし、黄さんたちの支援もした。この気丈なハンメは朝鮮人が理不尽な扱いを受けると、決まってトラの皮の上着を着て当時の保谷の市長室に出かけていき、杖で市長の机をたたきながら談判したという。筋が通った話しぶり、カラッとした人柄に市長も一目置いていたのよと黄さんは笑った。

■飛行機からエンジンを抜く

貧しい生活を生き抜くために、幼い黄さんも「お姉さん」として多くを任された。まだ小学校に入るか否かの頃の思い出だ。一番下の弟が生まれ、その子を背負い、手には他の弟の手を握り、母親が帰るまでご飯になりそうなノビルやくず芋を探して、毎日野を歩いていた。ある日、タニシを取ろうと田に入り、一生懸命探しているうちに、背中の弟の重さでバランスを崩し、あお向けに倒れてしまった。

「自分も弟も泥だらけ。だけど、背中が重くて自分ひとりでは起き上がれない。助けを求めて泣くうちに、自分のことが本当にみじめに思えてきて、大泣きしてしまった」という。今でも、

この時のことを思い出すと泣いてしまうと黄さんはティッシュを目にあてる。

「それともうひとつ嫌だったのは弟が風邪をひいたとき。オモニは仕事があるから、私が学校を休んで弟の看病をすることになっていたけれど、オモニは近くの医院に連れていくようにと言いながらお金を置いていかないの。医者におんぶして連れて行って薬をもらった後で、『お金は後でお母さんが持ってきます』というのが本当につらかった」

黄さんは小学四年生まで、「小さなオモニ」として弟たちの面倒をみる。ニコヨンで働く人たちの子どもを預かる託児所があり、そこに弟たちを預けてから学校に急ぐ日々。話しながら黄さんはまたティッシュ箱にそっと手を伸ばした。

黄さんが通ったのは地元の小学校だ。通名（日本名）で通っていたが、それでもいじめにあうこともあった。そんな時は一才上のおじが、いつも助けてくれる頼もしい存在だった。おじの中には朝鮮学校を勧める者もいたが、幼い弟たちの子守をしなくてはならない状況では、実際のところ難しかったろう。その上、黄さん自身も朝鮮人はすぐケンカにバクチだから「イヤ」と感じていた。

黄さんが小学校に入学するような頃、父の身に思いもよらない「大事件」が降りかかった。一九五〇年に始まった朝鮮戦争に心を痛めた若い在日が、朝鮮に軍用機を飛ばせないようにしようと、中島飛行機の敷地に入り、並んでいた飛行機からエンジンを抜くという行為に及んだ。当然、

近くの朝鮮人部落が疑われたが、その時、若い在日の身代わりとなって罪を被ったのが、黄さんの父（アボジ）だったのだ。父は有罪判決を受け、巣鴨刑務所に収監された。

「面会に行くと、青い着物を着せられて、足枷をはめられた父が、編み笠姿で出てきた」と黄さんの記憶は今も鮮明だ。父がいない間、母は帰ってくる父を新しい家で迎えようと懸命に働き、塗り壁の一軒家を建てた。しかし、刑期を終えて父が帰って来ると、その家は三カ月でなくなってしまったそうだ。

■西武バスの車掌

黄さんにとって楽しかったのは、弟たちの世話からもいじめからも解放された中学時代だった。親友もでき、ごく普通の中学生らしい日々を満喫した。

一九五五年に中学を卒業すると、一刻も早くお金を得たいと考えていた黄さんは、西武バスに入社を決めた。就職の際、ハンメと交流のあった市長が西武バスに一筆入れてくれたと黄さんは言う。入社許可を出すにあたっては身辺調査もする会社であったから、市長の「身元保証」はひょっとすると効き目があったかもしれない。

黄さんは西武バスの田無営業所に所属し、車掌として社会人生活の第一歩を踏み出した。朝五時半の始発から一二時半の早番を務め、欠員の穴を埋める形で午後二時半から午後一〇時半までの遅番にもほぼ毎日のように乗った。つまり一日に二人分の乗車をこなすわけで、給料も普通の

人が一万五千円程だったのに、倍近くの二万八千円をもらっていた。「一日中働いていたから私服なんて着たことがなかった。朝鮮の女性は白を大切にする清潔好きで、昼休みも車体やガラスを磨いてね、制服やくつもいつもきれいにしていました」

働き者でしっかりした黄さんはひばりが丘と武蔵境を結ぶ「ドル箱」路線を任せられる。乗車賃を入れたハンドバックは、終点近くには四キロから五キロにもなり、それを身に着けたまま「軽やかに」バスの誘導をこなすのは結構大変だったという。三年目には一七才で指導員に昇格、二十才からはボックスと呼ばれる定期券売り場で大きなお金の扱いを任されるようになる。十円の間違いもない仕事ぶり、しかも無遅刻無欠勤。若い黄さんが自尊心を持って誠実に働く姿が、昭和三〇年代の時代背景と重なってまぶしい。

西武バスに勤務していた一九才の時に父が亡くなった。享年四九才。遅く帰る黄さんを案じて、駅まで大きな犬を連れて迎えに来てくれたり、営業所前のラーメン屋に一カ月分の黄さんの昼代をきちんと支払っておいてくれる娘思いの父だったが、反面、黄さんが父のそしりに我慢できず、「自分こそ日本に来て、何か自慢できることがあるの」と言った途端、血相を変えて追いまわしてきたこともあった。たった一度の口答えだったが、この時は黄さんも声を上げて泣いた。

■結婚

黄さんが総連で働く李さんと出会ったのは、二二才の時だ。朝鮮から来た手紙をさらさらと読

みくだす李さんを、まずハンメが見込んだ。その時は断ったが、他の人からも李さんに会ってみないかと話があり、断りきれず会うことになった。デート当日（一月一日だったそうだ）、仕事が遅くなり、一時間半も約束時間に遅れた黄さんを李さんは待っていた。「給料が出なかったらどうしますか」というような、およそデートには似つかわしくない話をする李さんに、黄さんはふっと「この人を助けなくては」という気持を芽生えさせた。

「日本語しか話せないような相手では、仕事の足を引っ張る」と総連の李さんの周りでは反対した人もいたようだが、勝気な黄さんは「絶対迷惑なんかかけない」と、却って結婚へと気持ちが動いた。一九六六年、ちょうど札幌オリンピックの年で、北朝鮮から来日したスケート選手に付き添って、札幌に行った李さんに誘われて、黄さんも札幌まで応援に行った。これは今でもふたりの良き思い出である。

朝鮮語をはじめ、朝鮮の歴史や共和国の考え方など何も知らなかった黄さんは、結婚が決まると、仕事を辞めて二か月ほど青年学校で学んだ。「初めて聞く話ばかりで、本当に目を開かされた」という。今まで日本名を名のり、日本の学校、日本企業と歩いてきた黄さんにとって、共和国の思想を学び、民族的な誇りと自覚を確立する日々はどんなにか新鮮であっただろう。

結婚式は「純民族風」という言い方があるかどうかは分からないが、共和国の文化に則った正式なものだった。場所は朝鮮会館、「共和国」から来た生地を民族服に仕立ててもらい、それに身を包んで、多くの同胞からの祝福を受けた。結婚式とそれに続く新婚旅行の写真を見せていただ

いたが、どれにも晴れ晴れと美しい黄さんが写っている。「困難があってもそれに立ち向かっていく」そんな強い気持ちが、黄さんをいっそう美しく見せているように私には思えた。

■昭島の大火

熱海、大島への二泊三日の新婚旅行が終わって、帰ってみると新居があるわけではなく、ふたりは「鶏林荘」と呼ばれる住宅にある夫の実家に「同居」した。「鶏林荘」は百二十軒ぐらいもあり、在日も多く住んでいたが米兵相手の外国人女性、フィリピンやベトナムの女性もいたという。

一二畳と六畳くらいの二部屋と台所ぐらいのスペースしかない所に、シオモニ（夫の母）、夫の妹三人といっしょの生活だったから、新婚らしさは望むべくもない。が、今まで妹がいなかった黄さんは、急に三人の妹ができたことの方がもっとうれしかったようだ。その後、流産をしたことがきっかけで、夫の母が西立川に家を買ってくれた。「柱とトタン屋根だけの家で、トタン屋根の破れ目から星が見えるの。あわてて西武バスの退職金でベニア板を買って、張ってもらった」と黄さんは話してくれるのだが、「柱とトタン屋根だけの家」がどういうものなのか、私には想像ができなかった。

総連勤めの夫は同胞の支援活動に忙しく働いているが、金儲けにはつながらない。「給料が出なかったら…」が日々の暮らしそのものになった。黄さんは三人の幼い子どもの面倒を見、夫を手伝って総連関係の呼びかけや連絡などもこなしながら、いろいろな賃仕事を引き受けて家計を助

けた。「それでも子どもが小さい折には思うように働けない。そんな時はシオモニ（夫の母）が大根やキャベツを半分づつにして分けてくれた」

確かに経済的には苦しい生活であったには違いないが、食卓にはせいいっぱい工夫した料理が並び、うれしい時、悲しい時、歌や踊りが興を添え、なによりも同胞同士がひとつ家族のように気にかけ助け合う暮らしぶりが感じ取れる。それが在日家庭の明るさにつながっていると、私には思えた。

そんな精一杯の日々であった一九七一年三月一六日、東中神の一角で火事が起きる。当日、総連の大きな大会があり、黄さんたちもその大会に出ていて留守だったのが幸いした。火元は斜向かいの家だったから、もし在宅していたならどんな事態になっていたか分からない。「昭島の大火」と呼ばれるこの大火事で、在日、日本人の家あわせて百軒以上が灰となった。黄さんは結婚指輪も火事で失くしてしまうのだが、シオモニ（夫の母）が灰の中から見つけてくれたという。

被災者は玉川小学校に避難し、総連も炊き出しをして励ました。幸い日本人の自治会長が「なんとしても土地を守ろう」と強い意志で呼び掛け、皆一丸となって一帯の土地を自分たちの土地として守ることに成功した。立川ハウスがプレハブを建て、当座をしのぐこともできた。見舞金も全国から集まったと黄さんはいう。幸い、多くの家が火災保険に入っていたために、街はまた立派に蘇った。

■朝鮮大学の食堂で

三番目の子どもが六カ月になった時に、黄さんは朝鮮大学の食堂で働くことになった。二九才の時だ。大学のそばに朝鮮大学に勤めている人に向けた保育所があり、そこに一番下の子は預けることにした。保母さんが子どもたちに、朝鮮語で挨拶をしてくれるのがとても気に入った。それから三七年七カ月、黄さんは食堂の仕事をしてきた。

今、退職後の生活を楽しんでいる黄さんの家は、やはりきちんと手入れがされて、気持ちよく片付いている。古いアルバムを見せていただいていると、夫の李さんもやってきて、懐かしいねと見入った。長男、長女、次男の三人の子どもたちは大学、大学院と進学し、それぞれが家庭を持ち幸せに暮らしている。「私たちは二人だったが、三人の子どもが結婚して孫が八人いる。家族は全部で一六人になった」と李さんは感慨深げだ。

今回、黄さんを紹介してくれた人とともに話を聞いたのだが、その彼女は「黄さんは境遇に負けなかった人だね」と感想を伝えてくれた。本当にそうだと思う。それに付け加えるなら、私はやはり家族の力を上げたい。ハンメ、オモニ、シオモニを真ん中に据えた家族の力が、黄さんの今日をつくっているような気がしてならないのだ。そしてその力は黄さんから、また次の世代に確実に受け継がれていくのだろう。朝鮮カボチャが手に入ったからと、何枚もチヂミを焼いて私たちの土産にしてくれる黄さんの姿に、私はそう感じた。

理恵子さんへのインタビュー

■チャンゴに惹かれて

在日も日本で歳月を重ね、三世、四世と言われる若い世代が生まれてきている。日本で生まれ育った在日たちは日本と韓国・朝鮮についてどういう風に感じているのだろう。

理恵子さんは三四才、五年ほど前に日本国籍を取得した在日二世の女性だ。現在八三才の父は韓国、済州島の出身者だが、母は日本人という家庭に育った。家ではチェサ（先祖に供養する祭祀）ぐらいはするが、あとは「どっぷり日本文化に浸って大きくなった」という。その彼女が現在、朝鮮の太鼓（チャンゴ）の演奏家として活躍し、教室で教えたりもしている。

最初に彼女に会ったのも、「つむぐの会」のメンバーのひとりが経営するギャラリー「茶遊」で「コリアンワールドにようこそ」という展示会があり、見事なチャンゴ演奏を披露してくれた時であった。理恵子さんが当日演奏したチャンゴは、胴の部分を朱に塗り、大輪のボタンを描いたもので、その華やかな美しさが若い理恵子さんにとてもよく似合っていた。「日本文化の中で育った」在日女性が、朝鮮の太鼓であるチャンゴに興味を持つようになったいきさつは何だったのだろう。また若い世代のひとりとして、朝鮮や日本に対してどういう考えを持っているのだろうか…。さっそくインタビューをお願いした。

理恵子さんは小学校から私立の音楽大学の付属小学校に入学し、音楽を学んできた。音楽が好きだったことに加えて、音楽には国境がないと両親が考えた点も学校選びのポイントになった。

私立の学校で、理恵子さんは生き生きと学生時代を送った。子どもの時はサッカーとピアノに熱中し、大学時代はジャズにのめり込んだ。その延長で民族音楽を専攻に選び、インドネシアのガムランや日本の三味線などの演奏もしていた。チャンゴもそうした「民族音楽」を渉猟する中で、たまたま巡り合った楽器のひとつだという。そう話す理恵子さんには「朝鮮」の楽器だからという特別の思い入れはない。それでも一番長くやっているのもチャンゴだと笑った。

■韓国に留学

理恵子さんがチャンゴに出会ったのは大学を卒業してからだ。勉強が好きだったから、大学院へ進もうと考えたが、家庭の事情や学資のために、まずは就職して資金を貯めることにした。そしてそのかたわら、興味を持ったチャンゴを御茶ノ水にある韓国ＹＭＣＡで習い始めた。すでに世界のいろいろなリズムや音階が身体に入っていた理恵子さんは、チャンゴの上達も早かった。さらに学びたいと翌年の二〇〇一年、二週間ほど韓国に修業に行くが、朝鮮語ができないとチャンゴ修業は難しいと実感することになった。

朝鮮語は父の国の言葉である。しかし、日本人と同じ教育圏内で育った理恵子さんには、あま

り縁のない遠い言葉のひとつにすぎない。翌二〇〇二年、チャンゴ修業のため韓国を再訪するが、やはり朝鮮語の力が足りないことを痛感する。記号のような字体になじめないものを感じていたという理恵子さんだが、こうなったら猛勉強するより他ない。会社勤めの傍ら一年間ハングルを勉強して、二〇〇五年に、念願のチャンゴ留学を果たした。期間は半年間、場所はソウルとその近郊の仁川市というところだ。

たまたま専攻していた民族音楽の延長で、チャンゴに出会った理恵子さんであるが、韓国のテレビ番組で「民族的な血筋により運命づけられた出会い」として取り上げられたという。「まあそれならそれでもいいかと思った」と理恵子さんはいうが、あくまでも朝鮮の「血筋」にこだわる周囲の見方には少々辟易しているようにも見えた。

理恵子さんのユニークなところは、チャンゴの演奏者として研鑽を積んだ後も、その体験を他の視点で相対化しようとするところにある。勉強が好きで、将来は大学院に進みたかったという夢を実現させて、二〇〇八年、国立大学の大学院に入学し、世界各地の伝統音楽や芸能を研究する中で、昨年は伝統芸能の調査で訪韓した。そしてノリのいいチャンゴ仲間ではなく、細部を詰めて論理立てていく研究者と朝鮮や日本についてやり取りもしたという。

■向かい合うのではなく、多くの国々の関係性の中で

そうした経験を持つ理恵子さんが、いったい韓国と日本の関係をどう見ているのか、そして両

国の関係がよくなるにはどうしたらよいと考えているのかを聞いてみた。

「韓国は長い間、日本を仮想敵国としてがんばってきたところがあります。それが今日の経済発展につながったのも、ある意味事実ですが、歴史的背景に加えてそういう見方で長い間日本を見てきたので、両者が何のこだわりもなく溶けあうには、時間がかかると思います。

両国の関係が良くなるためにはいくつかあると思いますが、まずは日韓併合時代、日本が朝鮮に何をしてきたのかを真摯に学ぶこと、そして、相手の国がどんな歴史を学んでいるのかも知っておくことが必要だと思います」

理恵子さんは、日本では韓国併合すら教えられていないと憤っている韓国人がけっこういると指摘する。誤解はあいまいにせず、日本でもここまでは習っているときちんと伝えていくことも大切だと考えている。

「もうひとつ相手の誤解を避けるには、相手を理解しようと思うこと、関心を持つこと」といって、理恵子さんはソウルの公園で見かけた例を挙げた。ソウルの鐘路（チョンノ）付近の公園には、路上に住み、生活をしている人々もいる。留学中にその前を日本人旅行者たちが着飾り、声高に話して歩いていく光景にたびたび出会った。そのたびにそういう態度は好きではないと感じたという。

最後にあげたのは複数の中で議論を進めるという提案だ。日本と韓国が二国間で対面することももちろん大切だが、それでは行き詰ってしまう時がある。そんな時、第三者が入ることで議論

が前に進むことがあるというのだ。理恵子さんはハワイで行われた伝統芸能の学会でそれを感じた。韓国の研究者と二人で話していても理解が進まないと感じた時に、他国の研究者が加わることで、また議論が再燃し結果的には両国の理解が進んだという。

確かに向き合うだけではなく、日本と韓国を含む複数の国の人たちが「囲む関係」で議論をするというのは、大きな流れを共有でき、その流れを見ながら個々のケースを検討できるという利点がある。また相手を理解しようというモチベーションも上がるように思う。有効な手段としてこれから大いに活用してもよいのではないか。

在日朝鮮人についてはどういう風に見ているのだろう。理恵子さんは国籍を自らの「アイデンティティ」とイコールに捉える意見に対しては違和感を感じている。

「アイデンティティは西欧で生まれた概念で、韓国では『正体性』という字をあてています。例えばアメリカの場合は多民族国家で、アイデンティティを常に問われる国だから、そういう概念が注目されるのだと思いますが、アイデンティティを『自分を自分たらしめているもの』というように考えると、それが『朝鮮人であること』と国籍だけで考えるのは、少し寂しいのではないでしょうか。私にとって国籍はアイデンティティのひとつにすぎないし、どちらかと言えば手段ぐらいにしか考えていません。

親から見れば子ども、チャンゴをするときは先生、大学では研究者で、仕事もして・・・と様々な

側面が積み重なって自分が出来ている。その中にマルチなアイデンティティがあると感じています。『私は私』という感じでしょうか。」

理恵子さんは、本来誰もが、こうした多面的なアイデンティティを持っていると考えている。そして国籍だけを自らのアイデンティティと考えることで、思い悩んでしまうのなら、もっと広くアイデンティティを捉えることで楽になるのではないかと話した。

国籍を自らのアイデンティティと同一視する時代は、在日たちが厳しい状況下に置かれていた時代、国籍を拠り所にひとつにまとまらなくてはならなかった時代であるとも言えよう。アイデンティティをどう考えるかも時代の必要性と無縁ではない。在日も豊かな暮らしを送る時代が到来して、これからは理恵子さんのように「国籍」や「民族」に過度にこだわらない在日が増えていく予感はする。そして誰もが「マルチなアイデンティティ」を口にできる、これからであり続けてほしいとも思う。

理恵子さんは韓国に留学したり、訪問をした経験から、両国の政治的な面はともかく、庶民レベルでは日本人が韓流を愛するように、韓国の人たちも日本の歌や映画がとても好きだと教えてくれた。「とりわけ田舎の人たちは人懐っこくて、もてなしの文化も残っています。いくつか朝鮮語を覚えていくと喜ばれますよ」と、その時の思い出をなつかしむように、理恵子さんは最後に付け加えた。

■おわりに

私の「在日への気後れ」を何とかしたいとはじめたインタビューに、三人の女性が貴重な時間をつくってくれた。思い返してみてもそれぞれがそれぞれに豊かな時間であったと思う。もちろんにわかには、在日への気後れが消えるわけではないだろうが、少なくとも三人の女性たちとは何でも聞き、話す時間を共にできたという満足感と、なにがしかの視座を得たという思いで満ち足りている。今、インタビューを拙い原稿に起こしながら、あらためて彼女たちと日本で「共に」生きていることの果実、意味を思う。大延坪島への北朝鮮の砲撃事件など、二国が立ち並ぶ朝鮮半島では今後も想定内、想定外の事件が起きる可能性があると考えるのが自然だ。情勢に振り回されず、ひとりの生活者として、また人生を共に楽しむ女性として「ハムケ（共に）」をささやかに生きていけたらと思っている。

【参考図書】

「在日韓国・朝鮮人問題の基礎知識」（第二版）中尾宏著　明石書店
「朝鮮総連」金賛汀著　新潮新書
「閔姫暗殺」角田房子著　新潮文庫
「ディア・ピョンヤン」梁英姫著　アートン
「世界」一〇月号「帝国臣民から外国人へ」古関彰一著　岩波書店

農園だより

町田　輝子

今年はなんと不安定な気象だったか？

茨城の実家と立川にある菜園を世話することになり、同じような夏野菜を世話する毎日だった。

のんびりと栽培世話していた、昨年の夏がどんなにか、楽であったか。真夏日が続くと、成長をのぞむより、苗木が枯れてしまわないかと心配になり、雨乞いを天に祈る日々だった。

私の心が、どちらの畑にあるのか。作物もゆれる心を、天候と同じように見極めようとしていた。立川の枝豆は大きく成長しながらも実をつけなかった。母の介護をしている空ろな心を常に抱えていた私のようである。茨城の豆はしっかり実ってくれた。こちらの方が見つめる時間が長かったせいなのか。

九月になっても夏日が続き、立川の菜園は早々にキュウリは枯れてしまったが、その他の作物は収穫できた。ニガウリは八月よりも多く取れて、一雨ごとに実ってくれた。秋になって雨が降ってくれたからであった。

ハーブもよく育ち、バジルがつややかな葉を光らせて、他の作物を害虫から守ってくれる。この香り良いバジルで、イタリア料理を楽しんだ。お店でピザマルガリータを頼むと、バジルの葉が2～3枚しかのせていない、畑のバジルをわけてあげたいと思ってしまう。そして、そんな自分につい、苦笑してしまう。

十月になっても、茄子は実っていた。いつもだと夏野菜は終わりになっているのに、今年は暑い日が続いているので、まだ、茨城の畑も私の菜園も夏が終わっていない。ただ実の大きさは夏の盛りよりも、小ぶりになっている。茄子を食べすぎると頭がうつろになり、物覚えが悪くなるという。本当かな、だからあまり食べさせないでくれと、連れ合いがそう言って笑っているのだ。

今年は母の介護で二つの場所を見ることになったが、作物を育てることは、真摯な気持ちを持ち、どちらも手を抜かず育て、見守ることがとても重要であることを学ぶことができた。

十一月になっても、茄子は小粒ながらしっかりと、実をつけている。しかし、冬野菜にゆずり渡さなければならない季節になった。夏野菜には御苦労さま、心から感謝です。来年の夏にまた会いましょう。

編・集・後・記

●「つむぐの会」を知ったのは一枚のポスターからだった。映画会の主催団体の一つに「立川・女の暮らし聞き書きの会」の名前があった。立川の女性史を追っている人を探していた私は弾む思いで連絡を取り、二〇〇五年三月に話を聞くことができた。立川の女性史への関心はその十年ほど前に聞いた問題提起からだった。こう辿ると、今後も予期せぬ出会いが…、と期待がわいてきます。（田島　すみ子）

●明治・大正・昭和を駆け抜けた一人の女性イコン画家山下りん。その存在を知ったことで始まった足跡を追う旅は一年余り。私の故郷秋田、そして函館・神田お茶の水・笠間、サンクトペテルブルグが一つの線につながりました。表現者としての才能に恵まれた一人の女性のあまりに激しく、険しく壮大な八十一年の生涯に圧倒されます。（吉澤　エミ）

●在日、在日朝鮮人、在日韓国人、在日コリアン、一つの存在に対して複数の言葉があり、それぞれにニュアンスが違うようです。迷いながら今回は「在日」を使わせていただきました。大延坪島事件以来、緊迫する朝鮮情勢ですが、同じ民族が戦い合わなければならない不条理とそれに至る歴史に、胸がしめつけられるようです。（原　和美）

●今回は、妹のひと言をきっかけに書いたものである。あらためて取材したものはない。田中コレクションをアミューズ　ミューズアムで見たり、県立郷土館を訪ねた時の記憶と、長い間にため込んだ聞きかじり読みかじりの知識の断片、幼い日の不確かな思い出の綴り合わせである。たまたま作り置きしていた年表や青森県史のコピーを史実の裏付けとした。前記二館にも度々質問の電話をさせてもらったが、それらを手元にあった田中氏の著書で膨らませて頂いた。不確かな「点」が曲がりなりにも線となって少しホッとしている。（草場　弘子）

●今年は母の介護が主で一年が過ぎました。そういうわけで、「詩」と「農園だより」で参加しました。

葬儀が過ぎても、なかなか事実を受け入れられず、まだ生きているような気がしています。そして、今年が過ぎていきます。そこであたふたしている私が残っているのですが。新しい年は地に足をつけて、前に進まなくてはいけないと思っています。なかなかむずかしいですが頑張ろうと思っています。（町田　輝子）

つむぐの会
2010年12月12日発行（頒価600円）